

イノリミゴ

晃人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある東の地に、災厄を齎すとされる『忌み子』なる存在がいた。その稚児が持つ異質の力は、『祈り』と呼ばれ、人々に悪意を撒き散らすという。

少年であるウエンも、その力を自身から感じ取っていた。

この作品は「小説家になろう」「カクヨム」にも掲載しています。

目次

第一章

1 異形

2 漏出

3 見学

4 演劇

5 披瀝

第二章

6 三人目

7 変異

8 操縦者

9 前段階

10 嘆き

11 隙

12 真意

第三章

13 謀略

14 群れ

15 放流

16 生体

17 悔恨

18 会敵

19 特色

20 祈り

21 一幕

128 124 120 110 104 98 92 85 80 72 65 60 51 45 39 32 25 17 11 6 1

第一章

1 異形

煌々と輝く月が、夜半を照らしていた。

鬱蒼たる森の中を小走りで進む女性にとって、その月明りが何よりの綱である。

彼女の身なりは、薄布の頭巾に、所々継ぎはぎが為されている着物。そして、その腹部は、丸みを帯びて膨らんでいた。

息は絶え絶えで、表情に余裕はなく、裸足で駆け続ける両足は、泥と血で塗り固められていた。

不意に、樹木の根本に足が引つ掛かり、女性は体勢を崩す。

新たな生命に、決して衝撃を与えまいと、四肢を駆使して地面を抑える。その甲斐により、腹部に付着したのは跳ねた泥のみだった。

一種の恐慌状態に陥りながらも、すぐさま立ち上がり、その場から離れようとする。

しかし、その足は程なく止まった。

前方の木陰から、鎧に包まれた兵が姿を現すのが見え、彼女の顔から血の気が引かれた。

腰に刀を差した兵の一人である男が、言葉を発する。

「逃げられるとも思ったか？」

後方、そして横からも兵が現れ、完全に囲まれている事を察し、叫んだ。

「お願いします！　どうか、どうか見逃してください！　私はどうなっても構いません！　この子だけは——」

『『忌み子』は速やかに処分しなければならぬ。貴様も理解している筈だ』

「つ……その根拠が、ただ私の周りに災いを招いている事だけだなんて！　納得できません！」

「被害を被った住民に同じ台詞を吐けるのか？」

兵の男は淡々と連ねる。

「その兆候はついに表れ始めた。大地は揺らされ、作物は毒され、幾人もが難病を患い、それらによって齎された死者に向けてどう弁明するつもりだ？」

「……………」

「悪いことは言わん。今ならまだ間に合う。その赤子を産めば、異変はこの程度では収まらんぞ。すぐに墮ろせ」

「……………嫌ですー！」

女性は、両手で我が子を支えた。

「たとえば、災厄を携える危険があつたとしても——、生まれる前に裁く道理は、断じてありません！ 他の誰が見捨てようと、私だけは、この子の為にあり続けます！」

兵を真つ直ぐ見据え、膝をつき、

「人目のつかない場所で過ごします。もう皆さんにご迷惑はかけません。どうか、どうか見逃してください……………」

頭を下げ、消え入りそうな声を発した。

草を踏む柔らかな足音が徐々に女性の耳へ入る。

やがて目の前で足音が止まり、静寂が流れた。

兵は、尚も頭を上げない相手を見下ろし、

「では、今すぐ死んでゆけ」

素早く腰の刀を抜き、忌まわしき生命の源目掛け、女性の胴体を刺し貫いた。

苦痛、狂乱、絶望の入り混じった悲鳴が森林に鳴り響く。

兵は五月蠅そうに、音源を発する頭部を踏みつけ、刀を引き抜いた。

二人分と思われる鮮血が零れ落ち、刀を軽く払う。

「子は、遺体として回収させてもらう。準備しろ。原型は崩さないようにな」

部下へ指示を出した後、続けざまに、身重の体へ狙いを定め、

半円を描くように刀を振り抜いた。いかなる生物をも容易く両断せしめる、流麗な動きであった。

標的の胴体は繋がっており、目立つ外傷は先刻空けた細い風穴のみ。

彼女の体に変化はない。

男が訝しんだ次の瞬間、異変を感じ、刀を握る自分の腕に視線を向け、

「なっ——?!」

溢れんばかりに目を見開き、驚愕する。

腕は、異様と化していた。

幾千もの糸が捻じれたかのように、赤黒い肉の細かな繊維が独立して暴れ回る。一つ一つに意思が込められていると見紛う動きで、身に着けている衣服の袖や小手を切り裂いていった。たちどころに、それは全身へと及んでいく。

刀を落とす、絶叫を上げようと口を開く寸前、彼は見た。

足元に蹲っている女性、その背部へ突き刺した傷口から、濃紺の、霞のような何かが見れている。それは、まさに今起こっている異常の腕と繋がっていた。

やはりこいつが、災いの原因——、

男の思考は、全身を微塵にされた段階で余儀なく止まった。

霞は、次の標的を定めたかのように、他の兵全てへ移動する。

誰一人反応する間もない早さで増殖し、体を憑依され、瞬く間に摩り下ろされた肉塊へと変貌した。

塵殺の完遂を見届けたのか、霞は変化を止め、たちまち霧散して消えていった。

やがて、ただ一つ肉体が残っている人間の体が動き始めた。

正確には、這いつくばっている女性の腹部だけが、もぞもぞと揺らしている。

動きは一瞬止まり、

女性の体が、糸で包まれた繭が割れるように背中から真つ二つに別れた後、それは出産された。破水や血潮等の様々な体液が、破れた着物に沿って流れていく。

本来の過程を省略して生まれた赤子は、通常より小さく、肌も霞と同じ色に染まっており、何よりも際立つ特徴は、人としての形が定まっていないことだった。手足や目鼻口を適当に接着させた肉塊、そ

の表現が最も適切だった。

胎児は動き出す。が、その速さは鈍かった。突然外気に襲われた事も要因の一つだが、最大の原因は鋭い刃で突き刺された外傷である。母体を貫かれた刀は、その内にある命まで届いていた。

赤子は声を未だに上げないまま、弱々しく這いずり、遺体の上に乗ったまま移動する。

思いついたように一度停止し、微量な霞を発する。しかし、力が弱まっており、それ以上は捻出できず、諦めたように再び動き始めた。理性によるものか、本能によるものか、辿り着いたのは母親の頭部だった。

歪んだ位置にある眼球でそれを見た肉塊に、表情は全く伺えない。愛児は、頭と思われる箇所を少し上げ、すぐさま振り下ろした。

二つの頭部が衝突する。衝撃によって反発せず、密着し続けた。

やがて、黒い顔が沈み始める。熱した鉄で氷を溶かすように、女性の顔から、肉、骨、脳、あらゆる体組織がたちまち崩れていった。

顔の部分が終わると、肉塊は首の内部へ入り込み、着物の中を蠢き続けた。

時間が経ち、着物の足元から子が現れる。遂に母親の身体全ての『摂取』が完了した。

子に異変が起き始める。それは、肉塊が本来の人間へと形を取り戻していく現象だった。肌は通常の色へと変化し、体軀は六、七歳ごろまで成長していた。

全裸の少年は、瞼をゆつくりと開き、この世の風景をその目で見た。そのまま静かに立ち上がる。

朝焼けの空、緑で囲まれた木々、地面に転がっている赤黒い何かの数々、

視線は、自然と下へ移っていく。

そこには、至る所に血が滲み、原型を留めていないほどに破れた着物が広がっていた。

少年はじつと見つめたまま座り込む。

「ア……ウア……」

言葉を知らない少年の喉から発する音は、動物の鳴き声のように、およそ意味を成さないものだった。

しかし、『忌み子』である人間の脳は、目の前の惨状を理解する。

それは即ち、自分が母親を犠牲にしてしまったという事実。

少年は、泣き叫んだ。

押し寄せてくる感情に抗えぬまま、

森に、甲高い鳴き声が響き渡った。

2 漏出

少年は、歩き始めた。

一糸纏わぬ姿のまま、充てもなく森の中をよたよたと彷徨う。

背丈は伸びても、ほんの数刻前生まれただけの子に、思考する力はある、その軸となる根幹は虚ろのままである。母親の遺物を持つという発想すら出ないのも当然だった。

何をすれば全く分からない彼に残されたのは、足を前へ交互に動かすこと——、その唯一行える行為を繰り返す他なかった。

覚束ない足取りで、大地を踏みしめるように一歩一歩を進む。何度も転び、小石で肌を切り、体の至る所が泥と血で汚れていった。

それでも構わず、明確な目的も意味も持たないまま、少年は歩み続け、

三日の時間が過ぎた。

その間、水も食物も何も目にしていない。仮にそのようなものが目に留まったとしても、彼には様々な意味で、それを口に入れる判断が下せたのか怪しいものだった。

足取りはふらついており、速度も当初より遅く、一風吹けば今にも倒れそうな程か弱い様子であり、明らかに衰弱していた。

姿は一層増して汚れていき、遠目に見れば蓑虫が直立して移動しているかのように思える。

そんな放浪も、段々と歩幅が狭まっていき、遂に体力が尽きたのか、膝をつく。

前はもう見ていない。ひたすら続く代わり映えのない景色よりも、足元を常に注意したほうが有用と考えた為である。

だが、今やそれも必要なくなった。心身共に限界を迎え、これ以上歩く事の意義を、少年は見出せない事に気付いたのだ。

自然にゆっくりと、瞼を閉じた。

諦めの感情が支配し、体を動かす気力は沸かない。

このまま朽ち果ててしまおう——。

少年の胸中を言葉に表せば、それに近い思考だった。

そして時は更に流れ、

『忌み子』の命は未だ果てる事なく、

やがて聞こえたのは、人の声だった。

「おい……、生きてるか？」

目を開けると、白髪が目立ち、日焼けした肌が特徴の男性が飛び込んだ。

「全く……驚いたぜ。あんな草木しか生えてない場所に子供がいたとは」

自身が住む、カンラという町まで少年を背負い連れてきた、タオと名乗る男が呟いた。

「一体何があつたのでしょうか……こんなに小さな子が……」

タオの妻である壮年の女性、チユンが全身の泥を雑巾で拭き落としながら言った。

カンラに辿り着き、少年が見たものは、立ち並ぶ木造の家屋、作物を育てる田畑、自分らに注目する人々。

民衆は、少年とタオの事について幾ばくかの追及が続いたが、最終的に、ひとまずは第一目撃者であるタオが面倒を見るという結論で落ち着く事となった。

泥を落とし終え、子供用の着物を着せてあげると、チユンはそつと抱きしめた。

「可哀そうに……辛かったわね。もう大丈夫、怖い思いはさせないから」

タオは座り込み、少年と目線を合わせた。

「言葉もまだ分からんようだし、お互い不便はあるだろうが……、まあこれからゆつくり覚えていけばいい。よろしくな」

その日から、名もなき少年にとって、初めての日常が訪れた。

チユンはそれに伴って、最初に意思表示を覚えさせる事からとりかかる。

首を縦と横に振る行為、頷く事と、かぶりを振る事を実際に行わせ、

肯定と否定ができるように教えた。

「私は、チュン。わかる？」

彼女は、自分を指で指して尋ねる。

少年は首を縦に振り、それを見たチュンは、笑顔を浮かべて少年の頭を優しく撫でた。

「その通り！ よくできました！」

されるがままになっていいる少年も、自然と笑みが零れ、

「……ん……」

徐々に様々な表情を見せるようになった。

チュンと夕才は、連日家事や仕事の合間を縫って少年の教育に力を注いだ。

学習し、正しく理解した事への賞賛を惜しみなく受けた少年は、一層向上心と自意識を確立する。

尋常ではない速さで物事を吸収し続け、その結果、僅か二週間程で日常会話が成立する基準にまで至り、夫婦は大いに驚嘆した。

子供どころか、人間として見ても異常といえる智能だったが、三人が暮らす生活に支障はなく、その後も穏やかに日々を過ごしていった。

揃って食卓を囲み、

炊事や洗濯等の家事を手伝い、

夜、両隣にいる二人を挟んで、布団に包まれ就寝につく。

一日一日が充実しており、少年は、この上ない幸せを感じ取っていた。

同時に、罪の意識も大きくなりつつあった。

少年には、徐々に分かってきたのだ。

母親が死んでしまったのは、自分が原因である事を。

もし自分が普通の子として産まれていれば、この日常を、本来の母親と送れただろう。

不安と後悔が心を押し寄せる。

この気持ちに整理をつけるには、まだ時間が必要だった。そんなある日の夕暮れ時、夕才家に突然の来訪者が現れた。

「チュンおばさーん。お店の売上、忘れてってますよー」

玄関の戸を開けた人物は、十歳程と見受けられる、かんざしで髪をまとめている一人の少女。着ている着物は裾や袖が短く、露出した手足から動きやすそうな印象を抱く。

「やだ、ごめんなさい。ありがとうね。ユーリイちゃん」

急いでやってきたチュンは、差し出された布袋を受け取る。

その際に、ユーリイと呼ばれた少女は、視界に入った少年の方へ向いた。

「あ、もしかしてタオさんが見つけて引き取ったっていう、あの？」

「そう。最近元気になってきてねえ」

少年は、たどたどしく挨拶しようとする。見知らぬ人と会話するのはこれが初めてだった。

「こ、こんにち、は……」

ユーリイは、にこやかに笑う。

「こんにちは。たまにおばさんの店の手伝いやってまーす」

チュンが、少女の両肩に手を置いた。

「しっかりした良い子でねえ。私だけじゃなくて、他の人達にも親切によくしてくれてるのよ」

その後、思いついたように手を叩いた。

「そうだわ。もしユーリイちゃんがよかつたら、今夜はうちでご飯食べていかないかしら？ いい機会だから、その子と仲良くなってあげて」

「え、いいんですか？ もちろん喜んで！」

何かお手伝いする事ありますか、と楽しそうに談笑するユーリイを見た後、何となく気恥ずかしくなり、少年は奥の部屋へ移動し、障子を閉めた。

そして彼は、人との出会いに、胸の内から気分が高まるのを感じていた。

色んな話をしてみたい、仲良くなって、一緒に遊びたい、もっと、たくさんの人と触れ合ってみたい。

期待で溢れた少年は、様々な想像を巡らせる。

一通りの空想を終えて、自分も夕食の準備にとりかかろう、そう
思った直後だった。

何気なく下を見てしまい、

思わず眩く。

「え……う？」

濃紺の霞が僅かに、自身の体から滲み出ていた。

3 見学

「へー。こんな短い時間で、言葉覚えてたんだ。すごいね」

「そうなのよ。もう私より上手に話せるんじゃないかしら」

食卓を囲んでいるユーリイとチユンの賛辞に、少年は力無く答えた。

「全然、そんなことない、よ……」

声が震えたその理由は、謙遜や遠慮といった類ではなく、

例の霞を一寸たりとも表に出さないよう集中する為である。

言葉を習得した今、彼には『忌み子』という概念がどのようなものにあるのかを知っていた。

なぜなら、自身が生まれる直前、母親と兵が交わした会話の内容が耳に入り、それが胎内記憶として、鮮明に思い浮かべられるからだ。

忌み子という存在が明るみになれば、これまで親同然に支えてくれた二人から、どんな反応を示すのか不安でならなかった。災厄の存在として非難を浴びせられるか、これまで通りに愛情を注いでくれるのか。

ここへ過ごしてから忌み子の話題には一切触れられなかったが、子が生まれる前に母体ごと殺してしまえという前例があった以上、やはり良い目で見えてくれる線は薄い。

ならば、なんとか隠し通すしかない。

先ほど、初めて霞が現れて取り乱したが、深呼吸し、波立たない水面のように平静を心掛けたらすぐに治まった。

霞の力を制御できるようになれば、これまで通りに過ごせる。少年は、その希望に縋る他なかった。

ひとまずは、夕オとチユン、新たに加わったユーリイとの食事。この場を切り抜ける事が先決である。

「まだ、話すのはちよつと怖い、かな……」

固い表情を無理やり笑顔でほぐし、慎重に粟粥を口に運ぶ。

その直後、隣のユーリイが顔を近付けた。

「もつと自信持ちなよ。怖がってちゃ前に進まないぞ?」

少年は少し後退り、視線を外す。

「まだ、その……、もつと色々学んでからに、しようかな」
そう言うと、少女は微笑んだ。

『前に進む』って意味が分かってるなら大丈夫。失敗を恐れるな!」

ユーリイは、言葉尻に片手で握り拳をつくった。

「……う、うん」

失敗を恐れるな。その台詞は、少年にとって印象的に残った。

案外、自分の正体がバレても、この人達なら受け入れてくれるのかもしれない。

そんな期待をほのかに抱くが、その胸中には、拭い難い恐怖が刻み込まれていた。いつも優しくしてくれた二人が、あの時の兵のような憎悪を自分に向けてくるのではないか。

悲観に陥いる傍らに、少女は手を叩いた。

「よし。それじゃ、明日は私が町を案内してあげる。で、一緒に色々遊ぼうよ」

「……え?」

「それだけ話せるならもう充分。なら今度は、人と関わっていかないとき。せつかく喋れても相手がいらないんじゃないからね」

「いや、相手ならいつもおじさんとおばさんが……」

「駄目駄目、それだけじゃ。身内しか話せないなんて悲しすぎるでしょ」

片手を横に振るユーリイを見て、少年は考え込んだ。

もつともな指摘ではある。どのみち、このまま誰にも会わずに過ごし続けるというのは無理な話だろう。それでも、せめて霞の件を解決できるまでは目立たないようにしたかった。

俯き悩んでいると、少女の明瞭な声が聞こえてきた。

「わかった。じゃあもし君に何かあったら、私が助けるよ。約束する」
「……」

少年は、心が昂るのを感じていた。

目の前の少女がここまで案じてくれるのに、その想いを無下にはで

きない。何より、本当は自分でも行ってみたい。遊んでみたい。その気持ちに嘘はつけなかった。

少年は、タオとチユンに聞いた。

「行っても、いいかな？」

「ああ、勿論」

「気を付けてね」

あっさりとは許可が下りた二人を見て、ユーリイは微笑む。

「じゃ、決定。明日の朝迎えにいくから待ってて」

夕食を終え、ユーリイと別れた後、少年は、タオに呼び出された。

「明日が待ち遠しいかな？」

一呼吸置いて、頷いた。

「そうか。まああの子もついてることだし、多分大丈夫だとは思うんだが」

男は、少年の眼差しを受け、続けた。

「名前はどうする？」

「……え？」

タオは、頭を掻いた。

「流石に、一緒に遊ぼうって時に無名のままじゃあ色々厳しいだろ。俺の見る限り、もう自分で考えられるだけの頭を持つてると思うから、できればお前自身で決めてほしいんだが……」

少年は問いかけた。

「もしかして、ぼくの名前、決めてるのがあるの？」

「まあ、つけるならこれでいいかってのが一応——」

「つけてほしい！」

少年は、嬉しそうな声色で即答する。丁度、呼んでくれる名前がそろそろ欲しいと思っていた所だった。

「……いいのか？ 元々お前についてる名前があるかもしれないぞ？」

タオの言葉に、思わず俯きがちになる。だが、どれだけ胎内にいた頃の記憶を辿ろうとしても、なぜか明確なものは引き出せなかった。自分としても悔しい思いだが、育ててくれた里親に名付けてくれるの

なら、それで十分だと感じた。

しかし、それ以上の理由として、自分が忌み子である事を少しでも切り捨てたいという、母親に申し訳ない邪な気持ちもあったのだ。

少年は男に詰め寄り、

「お願い」

タオの双眸をじっと見続けた。

その視線を受けた相手は、何度も頷いた後、嬉しそうに口を開き、「わかった。正直こっちとしても嬉しいよ。ありがとう」

タオは、少年の名を呼んだ。

「——ウエン。それが、お前の名前だ」

——翌日。

「うん。すごくいい名前だと思う。よかったね。おじさんにつけてもらって」

家の前で迎えに来たユーリイは、笑って頷いた。

「ありがとう！」

少年は、喜びのあまりつい語気を強めて言った。

呼ばれる名前があることを認識していると気分が高まるのを感じ、これからの事に胸が躍る。

「じゃ、ウエン。早速だけど行くよ。ざっくりめにだけど、色々見せてあげる」

離れないようにと手を繋がれ、引かれるままに歩いていく。

二人は長屋を通り抜け、カンラの町を見て回った。

木造の建築物が整然と並び、どことなく綺麗な印象を受ける。傍らに植えられた松の木と共に見れば、より美しい景観として広がっていた。

進むと川があり、向こう岸へと渡る橋を歩く。欄干に手をかけて下を見ると、川の底の石粒や土が見える程澄んでおり、光の反射で眩く輝いていた。

そこから川の手先へ視線を辿っていくと町の塀に当たり、見上げると森林に覆われる山が聳え立っていた。

「わあ……」

見るもの全てが、ウエンにとってどれも新鮮であり、感慨深かった。ユーリイに手招かれ、橋から離れる。

そして、町のやや中央に位置する、店通りへと足を踏み入れた。歩く人の数は多く、老若男女の民衆があちらこちらで賑わっている。

ウエンが眺めていると、ユーリイが言葉を発した。

「こちらへんは色んなお店があつてね、いつも盛り上がってるの」「そうなんだ……」

少女は懐から布袋を取り出し、口を開けて小銭を掌に降らせた。「私が全部奢つてあげる。好きなもの食べていいよ」

数十枚の硬貨を差し出され、少年は呆気にとられた。

「さ、流石にそこまでしなくても……おじさんからいくらか貰つてるし……」

「固いこと言わない。ほい」

自分の手を掴まれ、強引に小銭を持たされた後、

「よし行かん」

ユーリイに引つ張られ、二人は人混みの中へと入っていった。

そこで見る売り物は、どれも新鮮な料理で溢れていた。

豆腐のような食感のものに果物を器に盛り付けた菓子、

豆花トウフアと呼ばれる食べ物を、ウエンは匙ですくって口に運んだ。

「おいしい……」

甘味の菓子を初めて味わい、思わず感想が零れた。

丸ごと揚げた鶏肉を紙に包んだ唐揚げ、

鶏排ジーバイは、少年の顔よりも一回り大きい為、ユーリイと食べ合う。

「んー、思ったより辛いわ、これ」

歯応えのある辛味が利いた肉は、ウエンにとってより食欲を刺激した。

餅米を蒸したものに串で刺した、黒色の棒状の一品、

猪血ジューシエガオを齧ると、もちもちとした食感が癖になり易く、楽しい気分

が一気に浮かび、

「豚の血を混ぜて固めたやつだけどねー」

ユーリイの一声で、直後に複雑な心境に変わった。

それでも血の匂いは全く感じない為、気を取り直して食べようとするが、

「あ……ごめん、ちよつと待ってて」

突然少女は、ウエンの元を離れる。

戸惑いながら目で追っていると、ある程度の位置で止まり、大人数人と話を始めた。

十歳程に見えるが、色々としつかりしている子であるのは、少年からもみて取れた。もしかしたら町に関する相談事でもしているのかもしれない。

そう少年が考え、何気なく振り返ると、

鬼のお面が眼前に迫っていた。

顔は赤く、角が生え、浮かべる憤怒の表情はより迫力に満ちている。

突然の衝撃に、青黒い霞が体中に広がるのを感じた。

4 演劇

ウエンはすんでの所で、霞を止めた。

自分の中に潜む異能の力は、ここへ来るまでに、殆ど制御することができていた。驚愕する程度の感情ならば十分抑えつけられる。だからこそ、今日は自信を持って外を出歩けたのだ。

「……」

目の前にいるのは、鬼のお面を被り、全身を風呂敷に包まれていた。音もなく近付かれて戸惑ったが、鬼はすぐに違う方向へと歩き始めた。

なんとなくその後ろ姿を眺めていると、ユーリイの声が聞こえた。

「わーお、びつくりしたねー。大丈夫？」

「……うん。あの、あれっていったい……？」

「あー、まあ、いわゆる芸者だよ。ああいう風に色んな人たちが趣向を凝らして町を賑わせようとしてる」

「そうなんだ……」

群衆に紛れて消えていった鬼を見届けてから、ウエンはある事に気付いた。

「ぼくのことって、知られてないの？」

食べ物にすっかり夢中になっていたが、改めて考えれば、余所者が来てから日はそれほど経っていないのに、誰も自分に注目しなかったのは明らかに不自然に思える。

「んー、さあ？ 私にもよくわかんない」

ユーリイは新しく買ったらしい品物を食べながら興味なさげに言う。

「皆自分のことに手一杯だから、新しい人が来てもあまり気にしないもんじゃない？」

そんなものだろうか、と思う。仮にそうだとしても一人くらいは話しかけてきそうなものだど、人付き合いが少ない自分でも普通に想像できるが。

そこで、別の考えが浮かんだ。避けられている、もしくは気付かな

いフリをしてきているのではないか。

それならば、今抱いている違和感も納得できる。今そこかしこに歩いている人々は、どこかよそよそしいというか、普通じやない空気を纏っているような感じがする。

もし自分を氣遣つてくれているのなら、それを突つつくというのも野暮だろう。いずれにしても、今は大人しくしておいたほうがいい。「ま、それより、今を楽しもうよ。まだまだ見せたいもの沢山あるから。ついてきて」

「あ、うん」

歩き出すユーリイに慌てながら歩いていくと、長椅子が何列か並べられ、その前に壇と卓が置かれている空間に着いた。

既に何人かが座っており、雰囲気から察するにこれから演目か何かを始めるようだった。

「間に合ったみたい」

空いている席に座ると、途中店先で買った焼餅——小麦粉とゴマ等を練って焼いたもの——を片手に、舞台が始まるのを待った。

ウエンは、餅に夢中になり、自分の分を早く食べ終えてしまうが、ユーリイがそれを見て、まだ口に付けていない焼餅シヤオピンを渡してくれた。「いいよいいよ。そんなに空腹いてないし」

舌に残る、忘れがたい味だったので、我慢できずに受け取り、ぱくりと齧り付いた。お礼を言ってから、尋ねてみる。

「おしばいが、好きなの？」

「まあね。ずっと楽しみにしてた。きっと面白いものが見れるよ」

ややあつて、派手な装飾の衣装を身に着け、顔が白く塗られている道化師のような男が壇に上がり、一礼する。

「それでは皆さん！ 大変長らくお待たせしました！」

道化師は、大仰に手を広げた。

「この日を何と待ち侘びたことでしょう……これまで私がどれほど血の滲む鍛錬を積んできたか、自分自身ですらそれは把握しておりません……」

大つぴらに拳を上げる。

「今ようやく、その成果を表す時が参りました！ 観客の皆様！ 未熟極まりない私の演劇、どうぞ応援の程、よろしくお願い致します！」
拍手と声援が巻き起こり、道化師は卓の中から、木杵を取り出す。
紙芝居だった。

「それでは始めさせていただきます」

「題目——『忌み子と祈り』」

かつて昔、とある村に、小さな男の子がおりました。

その子は、これといった特徴や才能はなく、唯一の取り柄といえば、人並みより前向きで元気な性格を持っていることでした。

そんなある日、異変が訪れます。

いつも通りの変わらない朝、目が覚めると、

自分の体から、真っ黒な霞が現れていました。

それは、『祈り』という、ありとあらゆる災厄を引き起こしかねない、恐ろしい力でした。

男の子は、その力を自覚して以来、前のような明るさがみるみる内になくなってしまいます。

祈りを持った人間は『忌み子』と呼ばれ、民衆から憎悪の対象となってしまうことを知っていたからです。

幸い、力を操る術を掴んでいた為、周囲から隠し通すことができ、表面上は変わりのない日常を送ることができました。

しかし、いつも遊んでいるやんちゃな幼馴染の女の子が、彼の変化に気付きました。何があったのかと問い詰められますが、答えられるわけもなく、じつと口を閉ざしました。

そうして数週間後、
突然、自分の内にある祈りが何の前触れもなく暴走を起こしてしまいました。

霞は様々な草木、畑、建物、そして人へと襲い、瞬く間にそれらの形が崩されていきます。

男の子は生まれ、生まれと叫びますが、全く制御は利きません。

村の全てが破壊されつくしてしまった後、ようやく祈りは息を潜めました。

そこに偶然、村の外で遊んでいた幼馴染の女の子がやってきました。

村の惨状と、一人座り込んでいる子供を見て、女の子はすぐに何が起きたのか、男の子が何者なのかが分かりました。

祈りが再び動き出し、目の前の相手へ向かい――、

女の子は、大きな傷を負いました。

男の子は、自分で傷付けてしまった相手の元へ歩み、なんとか治せないかと苦心しますが、血はとめどなく流れ出る一方です。

女の子は、自分の傷を止めようとしている忌み子が、次第に泣き始めたのを、朦朧とする意識の中で見て、

最後の力を振り絞り、言葉を口にします。

ずっと、友達だから。

女の子は、それきり動かなくなりました。

男の子は、亡骸を抱いたまま泣き続けました。

その間、村で過ごした思い出が駆け巡り、

やがて、いつも遊んでくれた女の子が残した言葉を切っ掛けに、

忌み子は立ち上がりました。

そして、あてもなく歩き始めました、

今度こそ後悔しないように、

自分が何者なのか、目を逸らさないように、

いつか、居場所が見つかる筈だと信じて。

最後の紙を引き、道化師が一礼するのがウエンに見えた。

だが、あくまで視界に入っていただけという意味であり、それよりも思考しなければならぬ事で頭は一杯だった。

やはり、『忌み子』という存在が知れ渡っている。

そしてそれ以上に、『祈り』という力が暴走する――。この情報が特

に印象強く残った。

勿論、絵物語の誇張された表現なのかもしれないが、自分自身が忌み子である経験上、あながちあり得ないとまで言い切れない。

どこまでが真実で、どこからが創作なのか確かめたい。しかし、あの道化師に、子供の自分がそのまま訊くのもまずい気がしてならない。周囲の反応も特に驚いている様子ではない為、判断がつかない。どうすれば――。

その時ふと、隣のユーリイに目を向けてみる。果たしてどんな反応を示すのか気がかりだった。

「うーん……、紙芝居だから仕方ないけど、やっぱり違和感出てるなあ……こう、無理やりいい話にしてるっていうか……」

「……」

珍しく、神妙な表情を見せていた。

忌み子について、どこまで知っているのかと悩むが、

「まあそこそこ楽しめたからいいや。じゃ、行く」

「あつ……」

早々に立ち去って、慌てて後を追った。

少女へ追いついた矢先、どこからともなく、ウエンと同じ程の年齢の子供達がやってきた。

「あー！ ユーリイおねえちゃんいたー！」

「どこいつてたんだよー？」

「はやくあそぼうよー！」

見るからにいたいたいけな三人は、ユーリイに密着してせがむ。少女はそれぞれに頭をなでた。

「ごめんねー。今ウエンと町を見てあげてたからさ」

少女から離れた一人が、こちらに向かった。

「えー、じゃあいつしよでいいからあそぼー！」

ウエンは少し驚き、遠慮がちに答える。

「……いい、の？」

「いや、何遠慮してるの。全然いいよ」とユーリイ。

残りの二人が、待ちきれないといわんばかりに興奮して言った。

「なんでもいいからはやくしよーぜ！」

「ほら、これ！」

糸で巻いた球——手毬を差し出され、受け取ったウエンを子供達が引っ張っていく。

「俺はローー！ よろしくな！」

広い場所へ移動し、五人で球を延々と蹴り合い、地面に着かせない遊戯を始める。

ウエンの番では何度も明後日の方向へ飛んで行った。

四人ともその度に笑い、むつと口を一文字に広げ、再度挑戦を繰り返す。

次第にコツを掴んできたのか、狙い通りに手毬を蹴られるようになり、ようやく勝負が成立する段階になり始めた。

「やるな——！」

「でも、まだまだだもんね！」

今まで山なりに描いたきた球が、今度は速い弾道で胸元に飛んでくる。ウエンはそれを捉えきれず、つい手で触れてしまう。

地面に転がる球を、汗を流して追いかけ、

ウエンは、楽しいと感じ、

ずっとこんな時間でいたい——。

心の底からそう願った。

遊び疲れた頃、夜が迫り、一日も終わりに近づいていく。

「すげえなー！ おまえ、スジがいいよ。マジで」

「……えへへ……」

すっかり子供達と打ち解け、ウエンは自然と口元を綻ばせてた。

「ほらほら、もうこんな時間だよ？ そろそろこれくらいでお開き」

ユーリイが手を叩き、えー、と一斉にウエンを含めて嘆いた。

「また明日遊べばいいじゃん。早く家に帰らないと叱られても知らな
ござい。」

その一言で渋々納得したのか、

「じゃ、ぜったいまたあしたあそぼうな！ ウエン！」

やんちゃ坊主の印象が強く、けれども心根が真っ直ぐな友達へ、元

気に答える。

「うん。ありがとう！」

三人の子供と、ウエンとユーリイが別れ、再び二人で歩く事になった。

「楽しかったね」

「うん。でも、皆強すぎだよ……だって、いつもすごい正確に嫌な位置に当ててくるんだもん。……悔しい」

「そりゃ、ずっと練習してるからねえ。皆的当てはお手の物だよ」

夕暮れ時の町を歩き、談笑する。

しかし、遊び終えて一息吐いた今、ウエンは悩み続けていた。

自分は、この町に居ていいのだろうか。

一緒に過ごしたチユンやタオ、ユーリイに、ロー達。今日だけでも様々な人々と触れ合ってきたこの町の民衆を、一つの過ちで殺しかねない力を持ったまま、凶々しく生きていくことなど許されるのか――

考えても、何一つ答えは浮かばなかった。

そんな所に、ユーリイから声をかけられる。

「ま、あらかた見て回ったかな。どう？ いい町だったでしょ」

「え？ ……あ、うん」

少年の苦悩をよそに、少女は笑顔を絶やさなかった。

「それは何より。じゃ、そろそろ帰ろっか。家まで送るよ」

その表情を見て、

「……あ、あのさ」

「ん？ どした？」

ウエンは、勇気を出して声を絞りだした。

「その……二人きりで、話したいことが、ある」

ユーリイは、少し考える仕草を見せ、歩き出した。

「町の外に行こっか。そこなら誰も邪魔が入らないから」

「え、外って……」

「大丈夫大丈夫。ちよつとの間だけだから。こっそりね」

困惑するウエンは、仕方なくついていった。

町の入り口へ向かい、門番と話をつけるユーリイと、不思議そうにそれを眺める少年。

その様子を、じっと見ている者達がいた。

5 披瀝

月明りが夜を照らしていた。

二人は森の中へ入り、しばらく歩き続けた。

「今日食べた中で、何が一番美味しかった？」

尋ねるユーリイに、ウエンは平静を装って答える。

「えっと、鶏排ジューパイがおいしかった。こんどひとりで食べられるか挑戦してみたい」

少女は、おもしろいね、とにっこりと笑う。

「楽しんでくれてよかった。またいつか一緒に見て回ろ」

「うん」

「あと、今度はロー達に負けないようにね。別の遊びだってまだまだあるから頑張って」

「うんー」

やがて、二人は足を止めた。

森の中にしては、木がそれほど密集しておらず、空がよく見える。先ほど出てきた町の方へ目を向けると、塀が遠目に移り、その両隣には山が連なっている。

「よし、ここらでいいか。で、話って？」

ユーリイは木に寄り掛かる。

「……」

落ち着かない気分の中、町を眺めている少女を見た。

やはり、言わなければならぬ。

ウエンの脳裏には、紙芝居を見た時から、町が滅びてしまうという想像が纏わりついていた。

あのような惨状を引き起こさない為には、打ち明ける相手が必要だと考えたのだ。

今日ずっと世話になってくれた、この人になら。

「お姉ちゃん」

「んー？」

少年の体に緊張が走る。

「じつは、ぼく」

一拍置いて深呼吸する。

そして、息を吐いて意を決し、

口を開いた。

「忌み子なんだ」

チュンやタオにも話すべきか迷ったが、明確に忌み子という単語を耳にしても動じない反応を示したユーリイが適切だと判断した。

そして、少女はこちらを振り返る。

「知ってるよ？」

自分が一体、何を聞いたのか分からないまま、

「君が初めてカンラに来た時からね」

更に、混沌の渦に思考が巻き込まれる事になった。

ゆっくりと渦が収まるまでの時が、夜の静けさと共に流れ、ウエンはようやくユーリイの顔を見る。

いつも通りの穏やかな表情を浮かべていた。

「どうして、チュンおばさんとタオおじさんがウエンを引き取ったんだと思う？」

淡々とした口調で告げる。

「私がそうするように操ったからだよ」

「もつと言うと、あの二人だけじゃなくて、町の皆全員、私の意のままに動かせるんだ」

ユーリイは、依然として変わらない様相だったが、つい先ほどまでとはまるで別人のように見えた。

「それくらい、祈り^イって言う力の汎用性は高いってわけ」

目の前の者が発した言葉は、少年には到底受け入れがたく、掠れる

ような声で訊いた。

「お姉ちゃんも……、『忌み子』、なの……?」

「うん」

あつさりと頷いた相手に対して、ウエンは呆然と見つめる事しかできなかつた。

「民衆が君に関心を寄せなかつたのも、紙芝居を開かせたのも、ロー達
が君を遊びに誘つたのも、私が仕組んだこと。まあ紙芝居は、忌み子
に関するものだったらなんでもいいっていう適当な注文だけどね。
あ、でも物語が好きなのは本当」

少女の長口上に、幾分冷静さが戻り、一つ訪ねた。

「なんで、そんなことを……」

ユーリイは、指を差して答える。

「君について調べたかったから。どういう経緯でここへ来て、何が目
的なのか。ぶつちやけると敵かどうか知れたかった。で、あまりに
無防備すぎたから分かったよ。本当に何も知らず迷い込んでここに
来たんだなって」

笑みを含んだ声色だった。

「ぼくを……どうするつもり?」

突然、彼女は一瞬に近い速さで目鼻の先まで詰め寄り、そして、ウエ
ンの腹部に掌打を見舞った。

「がっ……!」

鈍痛による衝撃と、内臓が圧迫される感覚を覚え、そのまま吹っ飛
ばされた。

地面に数回跳ね、ごろごろと転がり、静止する。

胃から食道へ逆流するのを感じ、咳き込んだ。

「ほら、どうするの? そのまま倒れこんで終わる?」

目まいがする中、圧をかける声が近付く。唾と吐き気を飲み込み、
脇腹を抑えながら片膝をつく。

もう片方の足を立てようとした時、ユーリイの姿は見当たらなかつ

た。

前方ではない、横か後ろのどれかから迫っているとあたりをつけ、上空へ跳んだ。

祈りの力を、ほぼ無意識の内から行使したのだと理解する。

できる限り周りを見て現状を把握したのは、自分が今、大人の背丈を飛び越す程の高さにおり、そして宙にいる自分を正に狙うべく、更
に上から襲い来る少女だった。

相手からの飛び蹴りを食らい、ウエンは斜め下へ墜落せしめんとする。

しかし、今回は体勢を整え、倒れる事なく二本足と片手で大地を支えることにより、勢いを殺しながら着地できた。直撃の瞬間、祈り——濃紺の霞を盾のように発現させ、攻撃を防ぐ事に成功した。

ユーリイも地面に降り、

「使い方慣れたんだ。割と早いねえ」

「……っ」

余裕の表情で呟いた相手へ、順応した力を振る舞おうと、右手を小さく掲げた。

彼女の言う通り、祈りについて、ウエンはおおよその性質を掴んでいた。この力は、言うなれば相応の質量を自在に操れる術であり、殺傷するに至って十分な威力を誇る。

上へ向けた掌から祈りを噴出させ、たちまちそれは人間大ほどの規模まで膨れ上がった。

そのまま、標的へ投げつけるように飛ばした。

ユーリイは横へ回避し、霞は木と地面を抉り取った。

繰り出した攻撃と入れ違いになるように、敵はこちらへ向かってゆく。

怯まずに、先ほど飛ばした霞の因子——紐のように残っている——を鞭の如く、かつその先端を手先で操るように動かし、より不規則な攻めへと転じる。

紺の巨大な蛇が暴れ回り、周辺の木々や土を、立ちどころに破壊する。

しかし、ユーリイはその猛攻を、屈み、飛び、地面に這い、悉くを回避した。攻撃の合間を縫って、半壊された木の根本を蹴り、迫る。だが依然より速度は遅かった。

ウエンは鞭を離し、相手の進行方向とは垂直になるように移動し、追撃を警戒して更に祈りを練る。

ユーリイは、足を止めた。

それ以上追う必要が無くなったのだ。

ウエンは背後から、別の第三者によって羽交い絞めにされた。

全く予期せぬ事態。尚且つ、拘束される速さも尋常ではなかった為、反応が遅れてしまった。足は地に着いていない事から、後ろの人物は大人らしい。

歯を食いしばった。この状態でも祈りは使える。咄嗟に密着している者へ直接攻撃を加えようとする。

しかし、

「やめた方がいいんじゃない？ よく見なつて」

絞められた相手の腕が意図せず視界に入り、祈りを止める。

見覚えがあった。

拘束が解かれ、落下するように着地する。恐る恐る振り返ると、

「……」

感情を何一つ浮かべていない、夕オが立っていた。

「言っただでしょ？ 操れるって」

ウエンはその様子を、呆然と眺める他なかった。

「大丈夫。もうこれ以上戦わせないから」

そう言い放ったユーリイへ向き直る。

「いや実を言うかね、試したかったんだよ。祈りをどう扱うのか。大体分かったからもういいよ。ありがとね」

ふてぶてしい口調に、眉間に力が入る。

だがユーリイが用意した町民の伏兵が、夕オ一人とは思えなかった。もっと大勢の人達に自分は囲まれている。これ以上戦っても勝機は薄いだらう。何より、ここで反抗しようものなら、夕オに危害が及ぶのは確実である。そんな中で戦い続ける精神は、とても今持ち合

わせていない。

考えれば考えるほど、理不尽としかいえない状況だった。

「そんな顔しないでよ、悪かったって。ここまでしといてあれだけど、君と敵対するつもりはないの、本当に」

両手を上げて少女は続ける。

「まあ、今は家に帰ってゆっくり休んで。積もる話はまた明日するよ」

一方的な展開に何か言い返そうとしたが、

「そうだぞウエン。反抗しても何も良い事はない」

タオが放った言葉——否、そう言わせたユーリイの言い草に口を閉じた。

そして、その場から立ち去るユーリイが言い放った。

「ちなみにだけど、他の町や村も、それぞれ別の忌み子の手に堕ちてるから。下手に動かないほうがいいよ」

やがて、自分の足は、今や馴染み深い我が家へ向かっていた。

その道中、町から出る前は大勢人がいた筈だったが、誰一人全く出歩いていない。それでも構わずに、我先へと目的の場所まで歩く。

戸口を開けると、その奥の和室に、何かの裁縫をしているチュンが座っているのが見えた。

急いで近くまで歩み寄ると、耳元で口にした。

「チュンおばさん。ただいま」

反応はなく、黙ったまま針に布を通す。

その様子はタオと同じく、表情に命が宿っていないかった。

「ねえ。ただいまって！ チュンおばさん！」

危険な行為だと分かっていながら、身体を揺すり問いかける。

しかし、少年の挨拶に、言葉を返すことはおろか、首を振ることも叶わなかった。

まるで、今まで優しくしてくれた里親がどこにもおらず、代わりに意思のない人形がひとりでに動いているかのようにだった。

「……………」

ウエンは、そのまま寝室に入り、布団に潜る。

真っ暗闇の中、改めて情緒が入り乱れてゆく。

いつの間にか、泣いていた。

涙がいくら溢れても、暗い気持ちは洗い流されず、虚しさだけが残される。

どうすればいいのか、何も分からなかった。

第二章

6 三人目

翌朝、陰鬱な気分のまま目が覚めた。

どんな思いで朝を済ませばいいのか見当も付かず、ウエンは我先に外へ出た。

町の様子は、人がまだらに立ち歩いているのが見てとれるが、どこか規則的に動いているように感じるのは気のせいではないだろう。

一瞥した後、町の外へ向かう。歩を進めると、草木が生え茂る光景が続く。

ふと足を止めると、

掬うような形に両手を合わせ、祈りを出した。

「……」

掌の器に収まるものをじっと眺め、

握り潰した後、適当な所へ投げ飛ばす。

霞は一定の速度で進み、障害物に当たらず、ある程度の距離で霧散して消えた。

「練習？ 精が出るね」

声の発した方へ振り向くと、さつきの祈りをまさにぶつきたい当人である、大きな布袋を持ったユーリイが歩いてきた。

「昨日は悪かったってー。朝ごはん食べてないらしいじゃん。これ、お詫びにと思って」

袋を置き、竹筒の水稲と、小さく切られた鶏排ジーバイを取り出した。包んである紙を破き、半分を露出させて差し出す。

ユーリイは、にこやかな笑みを湛えていた。

「ほら。好きって言ってたから。遠慮しないで」
「……」

受け取るつもりは全く無く、少女から視線を外すが、

「いらない？ じゃあタオおじさんにあーげよ」

「……っ！」

歩き去ろうとするユーリイの手から奪い取り、胃に流し込む勢いで口へ入れた。

食べ終わった後、

「朝食も済んだことだし、本題に入ろっか」

「……本題？」

訝しげに少女を見た。

「忌み子とか世の中についてとか、色々説明してあげようと思ってさ。聞きたくない？」

気にならない訳はないが、ウエンは疑心に陥っていた。

「信じると思ってるの？」

相手は口元を歪ませた。

「聞いてから自分で判断すれば？」

ユーリイはついてきて、と言って歩き、不承不承にウエンも続く。

「じゃ、まずは忌み子に関してね。ご存じの通り、祈りイリっていう能力を操れるのが主な特徴。祈りイリの力と書いて『祈力れいりよく』とも呼ぶ。これによって、殆どの人里は忌み子によって牛耳られている」

「……」

「忌み子は先天的なもので、ごく稀に胎児として現れる。その時、祈力れいりよくを得る為に、元となる原動力を本能のままに欲する。結果、最も身近にある栄養物、親の肉体を取り込む事になって、幼子の過程を飛ばした姿で成長する。これが忌み子の生い立ち」

思わず立ち止まりそうになった。

忌み子として生を受けた以上、母親が死ぬ事になったのは必然。その事実も、少年にとって計り知れない衝撃だった。

足を踏み締め、続きを待つ。

「祈りイリを制御するのも、呼吸の仕方よりも感覚的に覚えられる。脳の発達も早く、知識や思考能力を得るのも長い時間の必要がない。賢くなるかは別だけどね。大雑把な説明は以上。そして忌み子は、自然と町全体を支配することになり、何も持たず生まれた通常の人間はただ一方的に搾取される運命になる」

ウエンは反論する。

「そんなことないもん！　ぼくは生まれるちよつと前のことをおぼえてる。そのときは、忌み子の怖さもわかって、対処しようとしてた！」

必死の反論も、憐みの表情で返される。

「……あー、残念だけど、それも忌み子の方針ってだけだよ。実際に何人か偵察に行かせたからわかるの」

ユーリイは続けて言う。

「もし忌み子が奇跡的に存在していない集落があったとして、そこはどうなると思う？　別の者によって攻められて終わるんだよ。さっきも言った通り、ただの人間には祈り（い）に対処する術がない。従って、人が住む所には忌み子が紛れている仕組みってわけ。

そんな忌み子率いるそれぞれの軍隊で溢れた世の中はどうなるかっていうと、連日連夜睨み合い探り合い殺し合いが続く、群雄割拠ぐんゆうかつきよの世が出来上がるの。完全下僕の犠牲者を度々起こしながらね」

衝撃のあまり、顔から血の気が引くのを感じた。

「だからといって、あまり望んでるわけでもないよ。忌み子にとって、人材は貴重な財産。大事にしなきゃ」

ユーリイが足を止めたのは、草木に紛れ見渡す限り広い間隔で人が配置されており、その一人から九メートル程の距離を空けた所だった。

「この先にも見張りや警備がいる。防衛拠点的なのもあちこちに幾つかあって、更に進むとシャーネって名前の町がある。君はこの方向から来てた。他にも人里はあるけど、事前に探らせた情報を元に考える」と、まず間違いなく君の出生はその町になるね」

ウエンは太陽を見て方角を確かめると、今自分達は西に向かって進んでいた事を推測する。

生まれてすぐ裸で歩いていた時をぼんやりと思い出す。朝日に向かって進んでいた記憶があるので、自分の出身に関しては一応納得がいった。

「さっきいった、忌み子の方針っていうのは？」

「それを説明するにはちよつと脱線するけど、れいりよく 祈力を扱う忌み子にも、得意不得意や、それぞれの『特色』とくしやく っていうのがあるんだよ」

「……特色？」

「例えば——」

ユーリイは、挿していたかんざしを抜き取り、髪をぱさりと下ろした。

少年にそれを見せた後、

近くに立っている見張りの一人へ勢いよく投げた。

「っ！」

ウエンは反応するが、あまりにも速く、暗器は風穴を空けるべく標的へ向かい——、

見張りは素早く振り向き、かんざしを片手で難なく掴んだ。

「私の場合は、人を操ることに長けてるのが特徴」

見張りは凶器を持ち主へ力強く投げ返す。

先ほどと遜色のない速さで飛び、少女は何気のない様子で掴んだ。

「自分の身体も含めてね」

「……」

ユーリイは髪をまとめ、再びかんざしを挿して元の髪型へ戻しながら話し続ける。

「あと、他人を操る際、思考を持たせる自立式にもできるし、私の思い通り完璧に動かせる遠隔式にもできる。すぐに切り替えることも簡単。ま、使い分けが大事だよ。何事も」

昨夜戦った時を思い出す。あれだけ派手な動きができたのも、その特色のお陰というわけだと納得した。

「町民を全員、かいらい 傀儡としての支配下に置く利点は色々。怠け者や問題児が絶対に生まれないとか、敵襲があつた時、完全に統制された動きで迎え撃てるとか、れいりよく 諜報員が入り込んだら即座に感知できるとか。

でも、れいりよく 祈力の相性でそれが叶わない忌み子もいる。どんな力にも限界はあるからね。その時は別の方法で統治する。例外として単独で動く忌み子もいるだろうけど。シャーネの場合、忌み子という存在をあえて広め、その恐怖によって縛る方法をとってる。そうすれば比

較的普通より操りやすいし、何よりも使える祈力れいりよくをその分増やせるのが大きな利点かな。問題が起きたらその都度抹消していけばいい。方針っていうのはそういう事」

耳を塞ぎたくなるような情報に心を蝕んでいく中、ウエンはじつと堪えた。

「そんな中、忌み子がまた新しく自然に発生された時、大きく分けて二通りの処置を下す。自分の脅威に成り得る存在を生まれる前に消すか、新たな戦力として仲間に加えるか。私は後者で、あの町は前者。」

君はその両方に該当する形になった訳だね」

ウエンは眉根を寄せた。

「……つまり、協力しろってこと？　ぼくが、ユーリイに」

「その通り。決して悪い話じゃないでしょ？」

声を荒げ、舌足らずな口調で言い立てる。

「どんな理屈で力を貸せっていうんだ。平気で裏切るかもしれない相手と。町の人達をだまして、あやつって。それに手助けしろなんて、そんな悪事に誰が加担するもんか！」

それを聞いたユーリイは呆れ交じりに息を吐く。

「忌み子って大抵どこか歪んでるもんだけど、ウエンみたいなのはまた珍しいね。道理をやけに重んじる感じ。でもさー……」

その後、急に泣き顔を見せ、座り込んで大声を上げた。

「そこまで言わなくなたっていいじゃーん！　私だって生き残る為にやってきただけなのに！　君だって今の今まで生きてこられたのは誰のお陰だと思ってるの！　寝床とか食べ物とか色々貸してあげた義理を踏み倒すだなんて、ウエンの人でなしー！」

「……」

うえーん、と彼女は続け、嘘泣きの涙を両手で掬っていた。

「自分なりに考えた自衛のやり方を悪く言うなんて酷い酷い！　その悪事を下せたからこそこの人達は無事に済んでいられたんでしょー！　知ったような口きかないでよー！　——まあ、言いたいことは大体分かったけど」

三文芝居を突然消して立ち上がり、低い声で囁く。

「誰も傷つかず平穩に毎日を過ごすなんて、この世に忌み子が存在する以上絶対無理。利用できるものは臆さずに全部使う。そうしないところちが惨殺されて、それで終わる」

こちらへ詰め寄り、耳元で圧をかけるように言葉を置いた。

「理想論は口先だけに留めた方がいいよ。満足感だけ残して幸せになれるから」

そう言い残した後、少女はその場から立ち去った。

「……」

少年は、ただ静かに立ち尽くす他なかった。

カンラの町に戻り、昨日訪れた市場へウエンは向かった。

半日前には数多く並んでいた屋台がいつの間にか片され、広い道が続いている。

そこを歩く、様々な人々を改めて眺めた。

俵を担ぐ青年、手を繋いで笑う親子。店前の椅子に座って団子を食べる老人。風呂敷で包まれた荷物を背負う女性。

それぞれの意志を持たない民衆は、何一つ不満や悩みがない様子で日常を送っている。

目を背け、人気のない路地裏へと歩いた。

ウエンが抱いている胸の内には、無力感や寂寥感、

そして、疑念だった。

ユーリイの話には、説明が足りない部分がある。

当然、話がされていないものは他にもあるだろうが、群を抜いて気になる点があった。

それは、ユーリイの前にいた忌み子の存在。

町が現存していたという事は、形がどうであれ忌み子の手によって守られていた事になる筈。ユーリイが生まれる時、他にいたであろう忌み子はどうしていたのか。

二通りの可能性が思い浮かぶ。

一つは、ユーリイの手によって殺され、今の時点でこの町にいる忌み子は彼女一人という見込み。

もしくは――、

「なあ、ちよつといいか？」

唐突に声を掛けられ、足を止めた。

振り返ると、先ほど目に映った、俵を片手に持っている総髪の男性が立っていた。

十代後半程の年齢。前髪の殆どを後ろへ束ねており、日の下に晒された顔全体から生気が溢れかえっているかに感じた。

「二人きりで話したい。今後の事や――」

優しげに話し始めたその男をじつと見つめ、

「ユウリイについてもな」

一層、警戒を高めた。

どうやら、『意志』を持つ人間は他にもいたらしい。

7 変異

男が住むという民家に足を踏み入れた。

初めに抱いた感想は、身の回りに対して、あまりに無頓着すぎる、というものだった。

老朽化が進んでおり、屋根や壁を支える木材の柱は黒ずみ、床には至る所に穴が見受けられ、全体を見回せば廃屋と大差がない惨状だった。こんなところを好き好んで住処にしているのならば、まともな神経は確実に持ち合わせていない。

戸口から上がり、俵を隅に置くと男は言った。

「お茶でも出してやろうか？」

「飲まないからいらない」

そっけなく返す。敵の出された飲食物なぞ、一口たりとも受け取る気はなかった。

「当然の反応だな。ま、とりあえずそこで楽になつてくれ。さつきも言った通り、話がしたいだけだ」

ウエンはあえて、部屋の中央にある囲炉裏を横に、堂々と胡坐を組んで座る。

男も向かい合つてそれに倣い、

「まずはそうだな。俺に聞きたいことはないか？」

真つ直ぐに問う。「何者？」

相手は嫌な顔一つ見せず、流暢りゆうちやうに答えた。

「俺の名はボウ。察してゐるだろうが、忌み子だ」

特に驚かずに、次の質問に移る。

「どういう経緯でここに居るの？」

「およそ十三年前にカンラで生まれ、両親を食つて知性と祈力れいりよくを得た。その時にも『前任者』はいたんだが、生まれた時とほぼ同時に病気で亡くなって、それから俺がこの町を引っ張る事になった」

「……それだけ？」

「まあ正直、特別話すことなんてそんなないぜ。強いて言うなら、周りの忌み子から襲われないよう気を張り続けるのに苦労したつて所だ」

「……ボウは、どういう方法で町を支配したの？」

「今の状態をより嚴重に管理した形だな」

特に変わった出来事でもないように連ねる。

「休息は最低限、仕事は最大限に働かせた、子を産ませたら即座に親から離し、年齢ごとに区分けしてそれぞれの責務を負わせる。適度に体罰を振るいながら、常に訓練を怠らせない。病気や怪我を負おうが、強引に祈力れいりよくで治して元の仕事に戻す。それが主なやり方だ」

額の辺りを片手でかさえる。

やはりというべきか、こいつもまともではない。

「ところが、この方法だと簡単に人が壊れちまう。ちゃんと祈力れいりよくはかけてあるのに、突然泣き出したり暴れたり無反応になったりで使い物にならない。その状態を無理やり叩き直して元に戻すのが俺流だったんだが、いかんせんその頻度が高くてな。手間がかかって仕方ない。そこに、ユーリイが生まれた」

ボウは、人差し指を立てて笑みを浮かべる。

「あいつは、色んな意味で掌握術の才能に恵まれていたから、一任してみた。すると、あえて余裕を持たせる事で、効率良く操ったんだよ。何がなんでも道具のように動かしちゃ駄目だ、人間である以上、その心を理解する事が重要と説かれた時は目から鱗だったわ。もつとも、ユーリイなら前のやり方でも問題なく扱いこなせるかもな」

……忌み子の評価を改める訳ではないが、この場合は単にこいつが馬鹿、という解釈でいいのだろうか。

「人が壊れていく様は面白かったんだがなあ。もう滅多に見れないのが心残りだ。中でも傑作なのがある。あく確か……、監視役の一人が発狂して他人の息子を殺めちまった出来事があったな、

俺はその時、そいつをあえて正常に戻してやったんだ」

愉快そうに話を続ける。

「自分が犯した事をその身に味わわせた瞬間の表情が、実に愉快だったな。その後、『自分から狂うのは逃げだ。一生その罪を背負い続ける。殺したガキとその母親はいつまでもお前を恨んでるだろうかな』って付け足しておく、また味わい深いんだこれが」

たまらなく不愉快な言動のまま、

「しかも、今そいつは一連の出来事の記憶を消したまま一緒に過ごしてらってんだから、お笑いだよ」

ひひひ、と下品な声を上げた。

「もうわかるだろ？ タオとチユンがそうだ。あいつからつけられた名前、精々大事にする事だな。ウエン」

拳を握り締めた。

「なんでその二人に、ぼくを任せる事になった？」

思わず口調が乱暴気味になっていた。

「偶然さ。タオがたまたまお前を見つけたから自然とその流れになった。もつとも、似たような境遇のやつなんて他にもまだまだいるもんだがな」

「……」

深く息を吸い、吐く。

速やかに話題を変えようと、平静を装って本題に入った。

「ぼくに会いに来た目的は何なの？」

男は頭を掻きながら困った様子を見せる。

「まあなんというか……、基本的には今後とも仲良くやろう、という事だが、一つ注意してほしい事がある。ユーリイにな」

こちらの無反応という反応を受け止めたのか、ボウは続けた。

「忌み子には、祈力れいりょくや異常に早い成長の他にも秘密がある。『変異』と呼ばれる現象だ」

眉を寄せて、変異、と口だけ動かした。

「生まれて一定の期間が過ぎると、突然人格と祈力れいりょくが全く異なるものへ変わっちゃう。それが『変異』だ。そろそろユーリイに表れる頃合いになる。ウエンにはそれを見張っていてほしい」

新情報を脈絡無く聞かされ、疑問を投げた。

「……なんでぼくが？ それこそよく知ってるボウがやるべきじゃ？」

「勿論俺も監視するつもりだ。だが、しばらくユーリイを目にする機

会が多いだろうお前には、より重要な立ち位置になる。はつきり言つて、これはお前でなければ務まらない」

ウエンは、頭を抱えた。

「祈力れいりよくが変わるって、具体的に言うって？」

「それが全く予測がつかないんだよ。例を挙げると、人を傷つける事に特化した祈力れいりよく、それが一転すると自然を操る方向に変わっていたり。何の特徴もなかった祈力れいりよくが、一度人間ひとたびに触れると、急成長させて一気に老衰死してしまうとかない。

それに伴って、人格も同様、几帳面な性格が杜撰になったり、人を支配する趣味嗜好が変わっていたりもする」

聞くに堪えない戯言も、段々慣れつつあった。というよりは、自分が忌み子だからこそ馴染んでしまったのかもしれない。

「そっか。その『変異』が起こると、町の皆はまた別の形で支配されちゃうんだ」

同時に、他の忌み子から見れば対策を一から立て直す必要に迫られ、世の中はより混沌とした状況に陥る、という事でもある。

頭から手を下ろして訪ねた。

「そもそも、なんで変異なんてものが現れるの？」

ボウは、親指で自分を指して言った。

「経験者から言わせてもらえば、いわば転換期に近いな。体が成長していくにつれ、これまで放った祈りイの反動が合わさり、それに見合う形の新たな祈力れいりよくへ突如変化するもの、……とかじゃないか？ 俺自身細かいことはよくわからんけどな」

説明を聞いても、今ひとつピンと来なかった。おまけに語ってる本人の適当さが真剣に読み解こうとするのを阻害する。

「変異が起きたボウはどうだったの？」

けらけらと男は笑った。

「いや、俺の場合は比較的小さかったぜ。何せ祈りイを発する力がより強大になったってだけなんだからな。まあ一応は安心したよ。俺が俺のまままで」

そのような単純な現象もあり得るのか、と乾いた笑いが浮かびそう

になる。あまり鵜呑みにするつもりもないが。

「だが、ユーリイにはくれぐれも気をつける。さつきも言ったが、どう変貌するかは予測不可能だ。ある日突然、全てを台無しにして襲い掛かってくる可能性も排除できん。そうなったら俺とお前、二人掛かりであいつを殺して事態を収束するしか道はない。仲良くやろう、つてのはそういう事だ」

「……」

忌み子とは、大抵どこか歪んでいる——。彼女の言葉通り、共に過ごしてきた同類すら平然と切り捨てる様は、変異の話も相まって納得がいく光景だった。

「……ここに來てずっと思つてたけど、ユーリイに聞かれてないの？

この会話」

諜報員が紛れていても気付ける、と豪語した彼女を誤魔化せるとは考えにくいが。

「あー。一応気付かないようにしたつもりだが、最低でも会話までは聞き取られる心配はない。もし何をしていたか聞かれたら普通にお互い自己紹介したと言え。だが当然、あいつも変異の事は知っている。どういう事かわかるな？」

冷やかな目で相手を見据える。

「……ようするに、ユーリイが変異するかどうか、それを彼女に気取られないようにしないといけない、つて事？」

「その通りだ。察しが良くて助かるわ。今後もあいつからお前に何らかの情報を言い渡されるだろうが、変異については恐らくお前に伏せるだろう。彼女にとっては命が狙われる訳だからな。俺らの思惑がバレれば即刻殺しにかかってくると思えよ」

相手は前のめりに言葉を紡ぐ。

「変異の前には何かしらの兆候が表れる。少しでもあいつに違和感を覚えたらなんでもいい。俺の所へ知らせに來い」

いつになくボウは真剣な雰囲気を漂わせ、思わずその時の状況を想像する。

彼女に怪しまれずに監視する——、果たしてできるのだろうか。

「近々お前には重要な仕事が任される。その時までしばらくユーリイと行動を共にするだろう。どう立ち回るかは、ウエン次第だ。お前に全てが掛かっていると云っていい。くれぐれも細心の注意を払え。休む暇はないからな」

そう言っているとボウは、突然立ち上がった。

「つと、そろそろ不味いな。ウエン。今すぐここから出る」

「え、え？」ウエンは困惑する。

「これ以上話が長引くとユーリイに勘付かれる。ほら急げ」

一瞬の戸惑いの後、相手を睨みつけながら立ち上がり、入口へ向かう。

「重ねて言うが」

戸に手を掛けた所で聞こえたのは、

「絶対に悟られるなよ」

重圧を背負わせるような、呪いの言葉だった。

外へ出る瞬間まで背に視線を感じ、その線を断つように引き戸を閉めた。

振り返り、見えなくなった相手に向けて舌を出して、路地裏を抜ける。

忌み子が纏わる現実を目の当たりにした率直な感想は、心の底から嫌悪感が沸くものだった。

同時に、少しだけ気がかりな事に思いを馳せる。

初めて耳にした『変異』という現象。

突然人格が変わるとは、一体どういうものなんだろう。

なぜか、頭の片隅に引っかかっていた。

8 操縦者

ウエンは、祈りを発した。

青空に墨汁を塗りたくったかのような色が、少年の眼前にある土草や大木等の自然の景観が覆っていく。

かざした手の平から放たれている祈力は、徐々に肥大化していき、更にその勢いを増していった。

ありとあらゆる厄を、一箇所に集めたかのような息苦しい圧迫感が身を包む。

ウエンは歯を食いしばり、額から冷や汗を流す。浮かべる苦悶の表情からは精気がたちまち吸い上げられていく様が伺い知れる。祈力の量と体への負担は比例していくようだった。

紺の霞が巨大になり、家一軒程まで大きくなった所で、

「……………つはあー！」

祈力から手を放し、膝から崩れ、地面に肘をついた。

息を切らして顔を上げると、ゆつくりと霧が晴れるように祈りが霧散して消えていく。

「うーん、まあ今はこんなもんか」

離れた場所から腕を組んで眺めているユーリイが独りごちた。

「とりあえず一度で扱える今の限界は分かった。後はこれをどう使いこなすかだね。やり方によって、次の敵をどう倒すかが決まるから」

ウエンは息を整えながら立ち上がり、彼女へ向き直った。

「もう、相手が決まってるの?」

まあね、とユーリイは歩み寄る。

「今いるここは、シャーネの町とは逆方向にある東側の外。ここから更に先に進むとまた別の町、トンセンがあるの」

頭の中で地図を描く。西側にシャーネがあり、現在住む町にカンラ、そして東側にトンセンという名前を置いてみると想像しやすかった。

「そこを近いうちに叩く」

ボウの言っていた事を思い出す。重要な仕事を任される、とはこれ

の事だと察した。

「なんで襲うの?」

「二人で町の見学に行った時、一度別れたの覚えてる?」

「……たしか、鬼のお面に会って、ユーリイは離れて別の誰かと話をした」

あの時は、祈力れいりよくが漏れないように注意していたのを覚えている。

「あー、気付かないか……実はね、東側の町をずっと張らせていたんだけど、ある報せが届いたんだよ。それを聞きにいったって事」

得意げに話すのを見て、冷やかすように言った。

「操った人を見聞きした事、ユーリイが直接共有できるわけじゃないんだ」

動揺することなく、あつげらんとした調子で返る。

「いや、出来るよ? ただその方が楽ってだけだから」

「……じゃあ、どんな報せが届いたの?」

「教えな—い」

「……」

「ほら怒らない怒らない。祈りイが漏れ出るよ?」

ユーリイが両手で抑える形をとるのを見て、強い口調で尋ねた。

「伏せる意味は、何?」

「ちゃんと後で話すつもり。今は祈力れいりよくの修練に集中してほしいし、情報はやたらと与えたくない。わかるでしょ?」

「じゃあ最初から半端に言わないでよ」

ウエンは、次の目標である大木へ手を向けた。

祈力れいりよくに集中する間、少女の声が耳に入ってくる。

「まあつまり、事態が急変して早急に攻め入らなければならなくなっただって事だよ。今はこれだけ伝えとく」

大木の周りを祈力れいりよくで囲みながら考える。

何らかの事変が起きたというのは多分本当だとは思う。当然、忌み子に関する何かだとは思いますが、今の情報だけでそれを推し量れるだろうか。

一つ思い浮かぶものがある。

祈力の性質が変わるといふ、変異——。

ボウ曰く、その現象は前兆こそあるが予期せずに突然現れるといふ。それを知っている忌み子は当然祈力が何に変わるかも警戒する。その流れに沿うと、正に今の状況がぴったりと当て嵌まるのだ。

ユーリイの立場からすると——、他の町に目を光らせていたら、その町の忌み子に変異が起きた。その後変質した祈力は自分等の脅威になりうるもの。丁度新しい忌み子も手の内に加えられた事だから、それを試す意味も含めば色々都合よく、この機会に攻め懸けよう。という事が伺える。

力を入れて手を握り込み、祈力を一点に集中させて大木を八つ裂きにした。

ざつくらばんだが、大きく外れてはいない筈である。

もし自分の思い通りの考えであれば、やるべき事は何か。

他の忌み子を襲うという点については、その対象がどういうものなのか見てみない事には判断できない。

祈りの力をより理解し、高めるといふのも、自分にとっては重要だからこのまま続けたほうがいい。

問題なのは、ユーリイが変異するかもしれないといわれる点である。

兆候が表れるといつても、全く未知の領域にある為、どう観察するべきなのかが難しい。しかも、彼女にそれを悟られるなどというのが非常に難題だろう。

ボウから中途半端に与えられた情報の所為で、かなり動き辛い。

まさか、それこそがあつた男の狙いだともいふのか。

……思索しなければならぬ事柄が多すぎて、心の余裕がない。加えて、何かを一步間違えただけで自分の命がないのだ。

「どうしたー？ 急に固まって。何か嫌な事でもあつた？」

「別に」

ウエンは、思考が遮られたのを意に介さず、次の対象物を定めて祈力を練る。

「そういえばさ、ちよつと気になることがあつただけだ」

ユーリイは、首を大げさに傾けた。

「さつき、カンラのどこに行ってた？」

「どこ……っつて？」

「だからー、どの場所に行つて何をしてたの？」

極めて無反応に努めて、答える。

「昨日行つてた場所をきとうに歩いてた」

「ふーん。じゃああの辺の人達に聞いてみてもいい？」

「好きにすれば？」

その後、無言の静寂が続く。

ウエンにとつては、限りなく長い時間が流れているかに思えた。

特にボロを出すような真似はしていない筈だが、何か失敗していか、内心不安で仕方がなかった。

憤慨を覚える。自分が疚しい事をした訳じゃないのに、隠し事をしているような状況なのが、納得できなかった。

もう嫌だ。今は、落ち着いて考える時間が欲しい。

次の話題に移るか、早くどこか行つてしまえ。

そんな焦る気持ちが外に出てしまったのか、

「あつ……」

祈力が上手く制御できず、歪な形へ変わるのを見て、急いで消す。

ユーリイへちらりと視線を移すと、

「あらららー？ どつたの？ 集中切れちゃった？」

「……」

「まあこんな事もあるよ。切り返していこう」

何事もなかったように、彼女は明るく振舞った。

「よし、じゃあ次の修練に入ろっか。まずね、祈力は^{れいりよく}大別すると二つの種類に分けられるの」

自分の心情を余所に、「ちよつと見て欲しいんだけど」と少女は片手に小さく^{れいりよく}祈力を出す。

それは、朱と黒が混ざり合つた、彼女独特の色によって現れたものだった。

「二つは、君が今使った目に見える型、『霞』^{カスミ}。質量を持っているから主

に攻撃としての用途に使う」

徐々に、その彩りが淡くなり、後ろの背景が透けていく。

「で、その濃度が薄くなっていくと質量も軽くなって、極限まで薄めると目に見えない形の祈力れいりよくになる。この状態を『穢レ』ケガレって呼ぶの。これを使って、自然物や道具、人間の内部へ入り込んで対象を操る。私は普段これで民衆を操ってるの。目に見える祈力れいりよくが『霞』カスミ。見えない方が『穢レ』ケガレって事。分かりやすいでしょ？」

ユーリイは、祈力れいりよくを消して言った。

「ウエンにはまらず、穢レケガレを練習して人間を操る術を覚えて」

「……え？」

「対象はその辺の人間でいい。ただ注意してほしいのが、忌み子相手には通じないって所だね。他者と自分の祈力れいりよくが交わると本来の機能を失ってまともに働かなくなる。そうなると祈力れいりよくがどう動くか予測できなくなると危険だから、可能な限り避ける事。ただ見える方カスミの『霞』で攻撃する分には問題ないから」

「……やだ」

震えた声で絞り出す。

「人をあやつりたくなんか、ない」

敵の忌み子を倒す事ならまだ良い。だが、ユーリイやボウのように誰かを洗脳させて手駒にする。そんな光景は、考えるだけで悍わぞましかった。

ウエンの返答に不機嫌な顔を見せるかと思いきや、「あはははー」と少女は口元を抑えて笑い出した。

「あのねー、気付いてないかもだけど、もうとっくに使ってたんだよ。ウエンは」

「……え？」

「ここに來てから町を見学した日までの間、ウエンは無意識にタオとチュンを操ってたの。君が理想とする家族像を元に」

目の前の者が言っている事に、少年は理解を拒んだ。

「うそ、だって、ユーリイが、やったんじゃない」

「最初だけね。でもその後の、ウエンにどう接するかって所には手を

入れてないんだよ。突然君の問いかけに動かなくなったのは、ウエンが操作する事に意識を持って、その結果、操る糸を手放してしまったからなの」

「……」

あの、三人で笑い合った日々は、

全部自分が作った虚構。

紛い物。

人形遊び。

そんな、偽物の類義語が次々に頭の中を駆け巡る。

眼前の女が言っている事こそが出鱈目だと、否定したかった。

しかし、出来なかった。

本能が理解してしまった。

自分自身こそが、操った証人である故に。

ユーリイは、両手を叩いた。

「じゃ、早速始めよう！ 大丈夫！ 極めればもつと大家族で団欒を過ごせるから！ あ、一つ注意があるんだけど、誰を操るかは事前に教えて。うちの殆どの女性陣、もしもに備えて膾内に刃物仕込んであるの。私の管理下から離れて動き出すと偉い事になっちゃうからさ」

それから三日の時が流れ――、

来たる、襲撃の日が訪れた。

9 前段階

「——それで、この三日間は何も動きが無かったと」

ボウは、ウエンからの報告を受けて反応を返す。

二人は、以前会った場所と同じ廃屋で内談を始めていた。

「特にこれといった何かは見せなかった。いつも飄々としてて、祈りも性格も変わった所はない」

総髪の男は、不満気に腕を組んだ。

「そんな筈はないんだがなあ。見落としてんじゃないか、おい？」

無神経な言い草に、苛立ちながら答える。

「この三日間、どれだけ大変だったと思ってるの？ ユーリイを注意深く観察して、何度も何度もバレそうになって、その度に自然な形で誤魔化し続けたんだよ。一度も失敗はできない。ぼくの普段の姿も怪しまれないようにして、祈力の修練もこなさなきゃいけない。……本当に、辛かった」

ユーリイから、ボウと接触したのか、という言及はなかったが、それが却って心に負担を及ぼしていた。

弱音をこぼし、目を伏せようとした瞬間、

「甘えた事抜かしてんじゃないやねえよ」

突き刺すような言葉で止められた。

「失敗した行動の過程にも意味はある、なんて言う輩がいるが、所詮目的を成し遂げなかった事実の前に言い訳なんざ通じねえ。一丁前に泣き言を漏らすのは結果を出してからにしろや」

眉をぴくりと震わせ、反論する。

「だったらボウはどうなんだ。自分の目で見て、ユーリイに変化はあったの？」

「勿論だ。ちゃんと見せてくれたぜ。祈りの量がいつもより多く出ていたのをはつきり感じ取った」

「……」

誇らしげに語る男を、ウエンは茫然と見た。

ユーリイが祈力を発する場面を見るのはそう多くなかったが、自

分にはそんなものは全く分からなかった。経験者とそうでない者との違いはあれど、同じ忌み子でそこまではつきり相違するものがあるのか。

ボウは、溜め息を吐いた。

「まあいい。いつまでもお前の無能さに構っていられん。ともかく、ユーリイに変異の兆候が現れているのは確かだ。となれば、次に対処するべきは、彼女のその後を見極める事だ」

言いながら、人差し指を立てて身を乗り出す。

「今日、ユーリイと同伴でトンセンへ襲撃に行くよな？ 当然祈力を使って叩く事になる。そこであいつの様子を見定めろ。今度はしくじんなよ」

「だから、なんでボウがやらないの？」

「決行はお前とユーリイで行く。もう決まった事なんだ。それに俺が出張ったら警戒される」

ボウは元の姿勢に戻った。

「現段階ではまだ変異する二、三步手前つて所だ。ここからどう祈りが変わるのか、しっかり観察すればある程度は推測できる。——だが、

その祈力が極めて危険だと判断したら、殺せ」

冷静な口調で、しかし重みを含めた声色だった。

「今のあいつなら案外隙は生じている。特に、変異する瞬間は特に顕著だ。そこを狙え」

「……どういふふうに変異が起きるの？」

「祈力が急激に全身を包むような現象だ。その場にいれば一発で分かるだろう」

ボウの言葉を聞き、視線を下げて考える。

忌み子、

祈力、

変異、

トンセンという町への強襲、

最後に、ユーリイの姿が思い浮かび、

「ま、お前にできるかどうかは期待薄だがな」

「……」

ウエンは、冷笑気味に表情を歪めた男を睨み付け、

「聞いていい？」

かねてから抱えていた疑問をぶつけた。

「今この場で、ボウの祈力れいりょくを見せてほしい」

「俺の？ まあ構わんが」

ボウは片手を出して、金色が怪しく光る霞カスミをあつさりとし出してみせた。

「もつと操ってやろうか」

更にそれを、極太の腕のように変化させ、ウエンの頭部を掴む。

「なっ——」

突然、意識が揺さ振れる。顔が下へ呑応なく動かされ、地面へと叩きつけられた。敷いてある古ぼけた木の板が、僅かに凹む感触を味わう。

なおも強大な力で押し続けられる。めきめきと、下から木材の悲鳴が聞こえてきた。

「ほう。咄嗟にお前も祈力れいりょくを出して防御したか。対した反応だな。ちやんと上達してるようで感心感心」

地面と顔の間に、厚紙のような紺色が、ウエンを支えていた。

「お前の考えてる事はこうだろ。俺がユーリイに操られた、ただの一般人じゃないかってな」

男は、祈力れいりょくを手元に戻し、鼻で笑った。

「残念だが、この通り、俺は真正銘の忌み子だ。妙な邪推すんなよ」
「……っ」

押し付けられた体勢の少年は、目の動きだけで相手を睨んだ。

「そんな目で見んなよ。不意打ちを試してみたんだ。そこは、貴重な体験どうもありがとう、だろ？」

へらへらと、ボウは見下したまま嗤った。

指定した場所である、町の東側の入り口へ向かうと、ユーリイはい

た。

「お、来たね。準備は万端？」

ウエンは戦う際、祈力れいりょくを操るのに集中する為に、あえて素手の状態だった。

ユーリイの皮肉を受け流し、訪ねてみる。

「……そっちのそれは？」

彼女には、普段と全く異なる、際立った特徴があった。

袴はかまや脚絆きゃはん、手甲を身に着けている様は忍に近い印象を受け、軽快な動きを繰り出せそうに見える。手にするのは薙刀なぎなたが二本。背丈の倍をゆうに超える長さの得物を、片手にまとめて軽々と肩に担いでいた。

「武器。これを両手に一本ずつ持って戦うの」

正気なのかと問おうとしたが、ユーリイが一人で最大限活かせる戦法と考えれば納得はできた。縦横無尽に素早く動き、あの長さの凶器を片手で力強く振り回せば、恐ろしい威力を發揮するのは想像に容易い。

「流石にここまでなのは珍しいけどね。今回は一切遠慮する必要ないから、全力で腕を振るうつもり。——じゃ、ぼちぼち行こっか」

恐らく薙刀なぎなただけでなく、懐に幾つもの凶器を隠し持っている。

重装備の彼女に付け入る隙を見出すのは、かなりの難題だろう。

「この数日でウエンの特色が分からなかったのは残念だけど、ま、しょうがないよね。悪いけどその状態で今日は頑張ってる」

東へ歩き続けること三十分四半刻。草木が生い茂ってはいるが、比較的に晴らしのいい光景が続いていた。

「にしたってさあ、ウエンって穢ケガレの扱い、不器用だよな。あれじゃあ、いざという時戦いに困るよ。今回使わない方向だけでも」

ウエンは文脈を無視して口を開いた。

「本当にカンラは大丈夫？ 別の町から攻め込まれたらどうするの？」

忌み子の二人が町に不在で問題はないのか、という前提を踏まえた

問いである。

「私の兵達もヤワじゃないからね。総出で迎え撃てば十分戦える。それにその時が来たら、私へすぐに伝わるようになってるから、急いで戻れば十分間に合うよ」

大体予想できた答えだった。加えて、ボウという忌み子がカンラに残っているのだから、より安全だろう。この質問をした意図は、町の心配はしなくていいのか、とユーリイから怪しまれない為の方便である。

本当に聞きたい事柄はこの後だった。

「……こんなに堂々と歩いていいの？ 特に、そんな目立つ薙刀も持つて」

「普段だったら流石に躊躇うけどね。今回は別に気にしなくていい。相手が相手だから」

「それだけ強敵ってこと？」

「厄介な奴、ではあるかな」

「……ぼくが聞きたいのは戦う相手だけじゃなくて。今の姿を他に見られないかってこと。これから戦う相手以外の忌み子から見られて不都合にならないの？」

「それはない。まず今歩いている東の方向とは横、つまり南北は山に囲まれている。その先の周辺に人里は存在しない。となると、わざわざ山を越えて遠くからこんな所へ来ようと思わない。仮に来たとしてもすぐに分かるようになってる」

ウエンはうんざりするような顔を見せた。

「そこにも人員を配置しているっていうの？ ……いくらなんでも町一つからじゃ人数がまかないきれないんじゃない？」

「確かにね。でもそれは簡単に解決できる。他から持ってきてくればいい」

「……」

後ろ姿で分からないが、笑みを浮かべているだろう事は想像できた。

「一つ言っとくけど、元々その人達は私らに襲い掛かってきた連中な

わけ。祈りで酷使され続けて、その結果廃人になって、もう他に扱えないんだよ。気の毒だけど」

ウエンは密かに、その人達へお悔やみの気持ちを捧げた。
ユーリイは続ける。

「そんな訳で、ちゃんとその人たちが見張ってくれてるから、今この場を見られる心配はしないでいいよ」

「……そう。じゃあ、肝心の襲う町の実態はいつになったら教えてくれるの？ いい加減きかせてほしい」

「んー、じゃあまあそろそろ教えるか。トンセンという町はね、とにかく圧政の限りに尽くされてた」

ユーリイは語った。

「その忌み子は、祈りを以ってして堂々と姿を現した。そして、町の住人は文字通り全てを忌み子に捧げ続けた。毎日乱痴気騒ぎで好き放題されてたらしいよ。いやほんと、私も感心した」

彼女からしてそこまで言わせるとは、余程だったのか。

「町民は逆らったら、祈りを使った拷問という拷問の限りを一般公開で執行されちゃう。女子供老人でも容赦なし。反乱も逃亡も絶対に無理。何もなくても気分次第で理不尽に処刑されるし。もうね、半端じゃない暴君っぷり」

背筋が凍り、手汗がじとりと滲んだ。

「しかも、その欲望はだいぶ捻じくれた。無作為に選んだ人間を五人くらい選んで並ばせて、空気を吸い込んでしまうと肺が破裂してしまう穢レを辺りに漂わせて、一人が残るまで息を止めさせ続ける遊戯とか。

婚儀の時に初夜権を使って、先端に棘が幾つもある棒で挿し入れして、その状態で新郎への愛を延々語らせて、気に入る内容じゃなかったらその夫だけを殺すとか。

子供に何の益にもならない勉学をさせて、成績下位になったら責め苦に落とすぞー、って親にだけ伝えて歪んだ教育を強要させるとか。

他にも――」

「もういい！ 聞きたくない！」

想像するだけで耐えられそうになく、ウエンは立ち止まって声を荒げた。

「……」

その様子を、ユーリイは振り返ってじっと見つめ、言葉をかける。「ごめんごめん。流石に刺激が過ぎた。まあ君からすればやつつけがいのある相手でしょ？ やる気を出させてあげようと思ってさ」少年は落ち着いて、大きく嘆息した。

「それで、どうやってその町を奇襲するつもり？」

「いや、普通に正面から襲う」

「え？」

再び歩き始めた彼女の背中を、訝しげに見る。

「ほら、見えてきた」

ユーリイの言う通り、トンセンと思しき町の外辺が見え始め、すぐにその悍ましい異様、異質さに気付く。

これまで代り映えしなかった緑の景色、そこから先の領域が灰色に染め上がっていた。さらに近付くにつれ、その様相が徐々に判明してくる。

大地の至る所から絶えず噴出している霞カスミが、重苦しい景観の主な要因。植物や建物といった類は、渦巻状や網目模様等が合わさった奇怪な方向へ捻じ曲がっている。その空間を闊歩かつぽするのは、五体の形を辛うじて保っている浅黒い塊。顔はおろか、間接や骨すら見当たらないそれには、頭と手足の区別がつかず、五本の連なった太線がそれぞれ状況に応じて用途を使い分けているようだった。

一体、何が起きたらこんな恐ろしい光景を生み出すのか。思わず一歩引いてしまう。

しかし、異界の住人はその僅かな心の隙を許すつもりはなかった。引いた足に反応した塊が二匹、『両足』を駆使してこちらへ駆け寄る。

「っー」

二人は、それぞれ後方斜めへ下がった。それぞれ一匹ずつが、標的へ狙いを定める。形を変え、不規則な動きで迫る。

ユーリイは、最大限の長さを生かすよう片方の薙刀なぎなたを先端で持ち、軽々と横に薙ぎ払って足の部分を斬り、機動力を奪う。その隙に、もう片方の武器を中央で持ち、塊へ一気に近寄って素早く切り刻んだ。ウエンは、両手から霞カスミを放出し、逃げ場が残らないよう広い範囲に伸ばそうとするが、

「……っ!!」

小さな違和感が生じ、動作が遅れてしまう。その機を逃さないかのように、塊は飛び出した。

目鼻の先まで詰め寄られ、ウエンは手を叩く。

瞬間、左右に用意した祈力れいりよくの壁は、両手と連動するように挟み込み、

地割れのような轟音を響かせ、塊を叩き潰した。

間一髪で事無きを得て、深く息を吐く。

祈力れいりよくを解き、僅かに残った残骸がぼとぼと落ちてゆく。

そこにユーリイがやってきた。

「今のはね、例の忌み子の祈りイイが生み出したもの。意思がなくて予測のつかない動きをするから注意して。でまあ、町全体がこんな有様だから、特にこっちの手の内がバレても問題ないってわけ」

ウエンは彼女へ向き直る。

「……ここで、何があつたの?」

「あまりに暴政として祈力れいりよくを酷使したせいで、自滅した」

「……自滅?」

「ほら、ウエンも祈力れいりよくが制御し切れなかった事あつたでしょ? それと似たような感じ。自分の限界を弁えられずに力を使いすぎて、暴走してしまった祈力れいりよくが町を覆い尽くすまでに及んでいったの。いつかの紙芝居のようにね」

「……」

話を聞く限り、忌み子については全く同情が沸かないからいいとしても、その周りの人達が不憫でならなかった。終始いい様に扱われ、最後に至るまで怪異に巻き込まれるなんて――。

「じゃ、気を張って奥まで進むよ。今回の目的はその忌み子を仕留め

ることだから」

「……ねえ、そいつは、まだ生きてるの？」

「知性はもう失っちゃってるけどね。その状態でもこうして際限なく祈りを生み出してる。私の町まで祈力が届いて被害が出る前に叩いておきたいの。どう？　納得できた？」

「……わかった」

ウエンは、満足げに二度頷いたユーリイから、白が滲んだ黒の町へ視線を移す。

呪われた景色を、そのままじっと見据えて思索する。

腹をくくるべきなのだろう。

問題があるとすれば、先ほど祈力を発した時——、

その力が弱まっていた事だった。

トンセンへ襲撃する前、寂れた家屋の一室で、ボウは言葉を紡いだ。「建前として、『暴走』という表現であの町の惨状を説明するが、実際はこれも『変異』の現象だ。暴走する程祈りを制御できないなんてものは、よほど未熟じゃない限りは起こらん」

男は続けた。

「トンセンの忌み子に起きた変異は、本人の意思なく町全体を侵食する類のものだ。そして、ここ数日間でその規模が広がり始めている。以前までのそいつは、俺達と同じように祈力を駆使し、民を操っていたんだがな」

苦笑の表情を浮かべる。

「思えば悲しいもんだ。力を好き放題に振舞っていた時は、まさしく人生を謳歌していただろうに、予測不能の爆弾が爆発しただけで、自分自身を失ってしまったんだからな」

ボウは、聞き手へ視線を向け、指を差した。

「もう一つの方も、じき爆破するぜ。どんな結果になるのか、実に楽しみだ」



町の至る所が、ごみ捨て場のように鈍色の塊が散乱し、上を見上げると砂塵のように霞が漂う。それらの様子は、死を招く空間のように思えた。

ウエンは、人間大程の祈力を駆使し、迫り来る敵を迎え撃ちながら叫んだ。

「ねえ、ほんとにこの道で合ってる?! さつきからずっと襲ってきてるけど!」

ユーリイは二本の矛を振るいながら答える。

「これでもまだましな方。ひどい所はアレで埋まって道になってないくらいだから」

二人が進む道程は、祈力れいりよくと崩落によって町が損壊し、幾つかの建築物が地面と同化された事により生まれた、道なき道。その経路に人の意図した設計は及んでおらず、加えてトンセンの祈力れいりよくが次々に現れる為、現在位置や町の全容を把握するのが困難を極めていた。更に、「くっ……」

今日に限り、ウエンは祈力れいりよくを操るのに四苦八苦しながら戦わなければならず、常に苦戦を強いられていた。

背後から迫る塊へ、横へ飛ぶように振り返ると同時に、祈りイの大岩で裏拳を見舞う。

その時、体勢を崩して瓦礫へ倒れ込んだ。下が凹凸な為に、強烈な痛みが全身を走った。

歯を食いしばって痛覚を我慢し、視界の確保に努める。既に周りの敵はおらず、代わりに、同行人の戦う様が見えた。

ユーリイは、長物の武器を巧みに扱い、三匹の塊を相手取っていた。彼女の敵が繰り出される攻撃は、ウエンのような単なる突進や叩きではなく、やや変則じみた方法である、分裂だった。

三匹は、太線の先端から切り離すように次々と別れ、ユーリイの周囲を囲んでゆく。恐らく元々一体だったのが、戦うにつれて三つに分断したのでろう。

塊は示し合わせたかの如く、一斉に彼女へ飛び掛かった。

ユーリイは、薙刀の先端を片手でそれぞれ持ち、空中へ高く跳んで自身の体を勢いよく回した。

その円運動も単調に留まらず、回転軸までもが回転していた。そして軽々と振り回す武器の腕は彼女の意思の元で軌跡を描き、難解な規則性と不規則が合わさった、至極動きの読めない猛撃だった。

刃の舞はおよそ数秒の間。着地した頃には、細切りにされて動かなくなつた大量の軀と、

たった今、再び彼女へ攻めかかった、小さな四匹の塊。

「ちゃんと一緒に来てよ」

今度は、半回転程度の動きと中央で持った二槍で応対し、全てを斬り回した。

「二度手間は嫌なんだから」

「……」

一連の動作すら、矛同士で衝突する事も無く使いこなした彼女を、ウエンは静かに眺めた。

ユーリイはこちらを見て、やや距離がある位置にある建物へ指差した。

「今のうちにあそこへ突っ込むよ。あの中はまだ安全だから少しだけ休める」

かなり黒ずんではいるが、全体の大きさや模様の刻み具合から見るに、どこか格式ばった印象を受ける、二階建ての建築物だった。

二人は、素早く中へ滑り込む。戸を閉めた少女は顔の前に指を立て、小声で囁いた。

「大きな声は出さないで」

「……ここはどんな所？」

「私にも詳しい用途は分かんないけど、ああいう連中でも近付きたくない場所ってことじゃない？ 無意識にさ」

建物の中を見ると、中央に正方形の大きな台座があり、その周囲には長椅子が撒き散らすように転がっている。

元は見世物か何かだと想像するのに時間はかからなかった。

やっぱり、と思う。ウエンは薄々感付いていた。

あの塊の正体は、この町の人間、あるいはその意識の集合体のようなものだろう。半ば意思を持っているかに感じ、それが大量に存在しているとなれば、そう考えるのが自然である。ここが、忌み子の欲望を満たす為の施設——そう仮定すると、ここに寄り付きたくないのも領けられた。

これまで何人が相対してきたが、あれらの様子を見た限り、残念ながら既に手遅れだろう。下手に救おうと思わずに、この手で終わらせた方が幾分まし、と願うしかなかった。

ユーリイは土足のまま木造の床を上がり、手にした武器を床に置いた。

「じゃ、しばらく休憩しよう。で、二階に上がって窓から周りの様子を

確認する。それに応じてここから出るから。あともう少し」

一息吐いた彼女は、懐から鞘に納めた短刀を取り出した。室内用の凶器だと察した後、音もなく歩き出し、

「警戒は怠らないでね。確実に大丈夫ってわけじゃない」

隣にある階段を上っていった。

「……」

密かに二階の様子を見に行こうか考え、

隅の方から、物音が聞こえた。

別の入り口から、例の塊が入り込んできたのだろうか。ウエンは祈力を瞬時に出せる用意を整え、音のした場所である、長椅子や卓で積まれた小さな山の向こう側へ近付いて行った。

「イ……ミミゴ……サマ」

予想通り、それはいた。大きさは少年の背丈の半分にも届かず、塊同士が絡み合っており、どういう体勢でいるのか外観からは全く分からない。

ウエンの姿を認めたらしく、塊は呻き声を上げた。

「ワタ……シノ……イモウト……」

こうして間近で注視するのは初めてだった。よく見れば、目や口といった部位が薄っすらと滲むような形で見て取れる。

「オオセノ……トオリ……」

その視線と、目が合った。

「カタ、メ……タベサセ……マシタ……コレデ……オユルシ……ヲ

……」

「……」

その塊に、眼球が一つしか見当たらない理由に得心がいき、

ウエンは慈悲を込めて、霞の槌を振り下ろした。

小型犬を潰したような感触と短い悲鳴を身に受ける。

この人が、他が避けてしまうこの見世物部屋に執着するという事は、よほど思い入れがあったのだろう。

祈りを消そうとする。しかし、不調の所為かその段階が遅れ、結果的に穢レとなってしまう。それが塊と混じった瞬間、

「縛ウ縋ア縋ヲ縛阪ワ縋、縋「縋ヲ縛イ縛ツ縋、縛、縋ゆ♀縛エ縛九r
縛ハ。 縛帙※縋オ縛エ縋薙↓縛九@縛ヲ縛ゆ？ 縛漚▽。 縛漚▽縋峨l
縋九o 縛漚@縛ツ縛ゆ↓縛ハ%縋キ縛薙l 縛ハ。 縋ツ縋√←縋、縋ヤ
縋峨l 縛エ縛上※縛斐a 縋薙o。 縛、縛弱ワ縛エ縛オ縋偵h 縋ヲ縋、
縛ハl 縛l 縋、縋、縋薙□縋阪≧。 縋上◆縛ハ←縛ツ縋ゆ≧縋、縋弱
k 縛薙↓縛ハ。 縛ア縛阪→縋、縛翫o 縛後▽縋、縋「縋ヲ縋医r 縛漚
☆縛代※」

叫声が発せられ、ウエンは急いで、新たな祈りで止めを刺す。

「……っ」

自らの手で平らにした、白黒の塗料と見分けのつけ難いものを見て、

少年は膝から崩れ、正気が狂いそうになり、
顔に両手をあてて抑えた。



薄暗い部屋の中、ボウは続けた。

「変異というのは、精神の負荷からも影響を及ぼす。人格までもが変質する理由は恐らくそれだ。無論、その作用は祈力れいりよくにも繋がる。心身の状態によって、どう変異するかが決まるといっても、まあ過言ではないだろう」

「……」

ボウの講釈に耳を貸している相手は、黙って続きを待つ。

「忌み子にある、精神と祈力れいりよくの関係は、一言では言い表せない程に複雑で深い。とりわけ、変異が起きた後の心理状態は安定している場合が殆どだ。何せ、一つの壁を乗り越えたような感覚に近いからな。

それ相応の器に、祈りイウと人格が新しく移れば、未熟な忌み子とは程遠いものになる。——つまるところ、

既に訪れたユーリイに、変異は二度と起こらないってわけだ」

1 1 隙

鼠色ねずみの世界の中にある、かろうじて路地裏と呼べるような細い道が続いていた。

「はー、そんな事あったんだ。まあ珍しい話でもないよね」

トンセンの目的地へ向かう道中、ウエンの見世物部屋の話聞き、ユーリイは興味無さげに呟いた。

「それ以外にさあ、他に何か喋ってなかった？」

否定的にううん、と答えると、少女は溜息を吐いた。

「これからの戦いに役立つ事が聞けたら、思わぬ収穫だったんだけどなあ」

今回、ウエンには忌み子を討つという事以外にも目的がある。しかし、彼女の様子は一向に変わる気配が無い。

少年は尋ねた。

「ユーリイは、ああいうのを見ても平気なの？」

「私、見てないし」

案の定な回答が返ってきたと思いきや、次の言葉は意外なものだった。

「でもまあ、それなりに思う所はあるかな」

「……え？」

「そりゃ、可哀そうだと感じるくらいには共感するよ。私の支配下に入ればまだましだったろうにね」

一応、そのままの意味だと捉えておく。

「……びっくりした。ユーリイにそんな感情があつたなんて」

「こう見えてもね、必死なんだよ私も。敵に襲われない為に見張りやら視察やら、あらゆる準備を施して備えないと不安になる」

そう語った彼女の表情は、先頭を歩いている為、拜む事はできなかった。

「だからかな……、いつも私が、他の人間を手中に収めようとするのつて、その表れなのかもね」

ユーリイは、立ち止まった。

「まあどの道、あいつを倒さない事には始まらないんだけれども」
彼女が見据えた先には、例の忌み子と思しき存在が佇んでいた。

風体としては、全身が例によって灰色に塗りつぶされている事を除けば、普通の人間と大差ないように思える。十代中頃に相当する身長で、特筆すべきは、絶えず体から漏出している、臃げな祈力れいりょくである。濃度を見ると、あの忌み子の霞カスミは三、四割程と思える。あの状態でこちらを攻撃されても質量が足りず、損傷には至らないだろう。

問題は、その尋常ならざる量。本体の三倍近くが祈力れいりょくで覆われ、なお尽きる事無く漏れ出ている霞カスミをどう搔い潜るべきか。

「一つ幸いなのが、休憩所の時みたいなのに、他のアレがここに寄ってこない事。よっぽど人望無かつたんだらうね」

周りを見渡してみると、瓦礫の数がひとときわ以上増しており、元の建築物を一切推し量れない惨状だった。

「あいつの『特色』は何？」

「ない。というより、今のあの状態こそが特色みたいなもん」

ユーリイの言葉を聞き、ウエンは静かに忌み子を見つめた。

変異が起きてこうなつたと考えると、どうにも複雑な思いを抱く。

まさに今その現象で巡り、争い合っている事も重なり、猶更そう感じた。

「準備しといて」

ウエンは頷くと、濃紺の祈りいのちをいつもの倍の大ききで捻出させ、態勢を整える。

ユーリイは、薙刀を一本持った片手から、朱色が混じつた祈力れいりょくを小さく出し、そこから分離して、薙刀を空中で独立させた。指一本触れず、確かめるようにその武器を自在に回す。その後、残りの一本をそのまま両手で持ち、刃先を下段に構えた。どうやらこれが彼女本来の戦い方らしい。

「そろそろいい？　じゃあいくよ」

「……う、うん」

合図と共に、空中の矛が灰色の忌み子へ真っ直ぐ飛び――、
標的へ命中する直前、舞い上がるように大きく跳ねた。薙刀は忌み

子を飛び越え、背後へ回り込んだ瞬間、急降下して振り下りた。

同時に、二人が飛び出す。

先ずは背面の刃から入った。まるで体幹を乗せたかのような重い一振りだが、鈍色の霞を切り裂いていく。

相手は一瞬、それに気を逸らした気配を感じ、ウエンは自作の祈力を片手にそのまま突っ込む。その速度を乗せて、大岩に近い質量武器を撃ち出した。

攻撃は鈍い音と共に命中し、強打された忌み子は奇声を上げながら吹っ飛ばされた。そして、周りに纏わりついた大量の霞が、引つ張られるように本体へ追っていく。

その瞬間の、僅かに祈力と忌み子が別れた時を見て、次はユーリイが飛び込んだ。

先程の攻撃である、空で発射させた矛より遙かに速く、進行方向は標的とやや外れているが、その分薙刀を横に伸ばして刃先を届かせていた。

通常であれば、この一閃に力を乗せる事は到底不可能だが、ユーリイの祈りによって、巨人の薙ぎ払いにも等しい力の技へと昇華させた。

一瞬の内に灰の忌み子は深い創傷を負わせ、奇声を更に高く調音する。

が、周りの祈力は直ぐに元の持ち主へ返っていった。「やっぱり、まだ簡単にはいかんかあ」

そうぼやいたユーリイが武器を構え直し、ウエンは再び祈力を練る。

見ると、相手は四肢を地につけ、獣のような態勢をとっていた。そこへ、鈍色の霞が集まっていく。

すると突然、再び祈りが周囲へ広がり、そのまま緩やかな放物線を描いて、地面へ降り注ぐ。

その直後、祈りの寵愛を受けた瓦や木材、石の破片等が、大量に浮き上がった。

「っー」

それを見たウエンは、後退しながら前方に身を守る壁を張るように祈力れいりよくを操る。体を横に向き、膝を曲げて姿勢を揃える。

予想通り、相手が繰り出す攻撃は無数の石礫だった。

礫が連続で衝突し、盾を通じて少年に幾つもの激しい衝撃が伝わる。

「……………」

まるで横から大地震を受けてるかに思え、壁の維持を務めるのに精一杯になり、

——ユーリイはどうなってる？

疑問に思った少年は目を細め、祈力れいりよくの壁に石が通らない程の小さな穴を開けて、忌み子の向こう側にいる少女へ視線を向ける。

彼女は、ご自慢の槍で破片の雨霰を次々と叩き落とす行為と、微妙な動きで細かい石を避ける回避を織り交せてやり過ごしていた。

特に不思議にも感じなかったが、守りに徹しているのを見る限り、流星にこの状況で無謀な突っ込みは控えておくようだった。

石礫は落ちたものから再度補充していき、尽きる雰囲気は全く伺えない。

この後はどうする。少しこのまま様子を見ようか。

そう思考した直後、

ユーリイが瓦礫の一片を打ち、こちらへ飛ばしてくる。ウエンが築いた盾に勢い良く命中した。

「いっ……………!?!」

突然の激しい振動に揺り動かされ、壁を保たせたまま動揺が走った。

少女はその後、宙に浮いたもう一本の薙刀を高速で回し、円状の盾を作り出して凌ぎ続ける。

一連の行動の意図が読めなかったが、何も変化が無いのを見てようやく理解し始める。

——私では現状攻める事ができない。だからここからの攻撃はウエンが仕掛ける——。

少年は考えを巡らせた。

手傷を負わせ、錯乱している今なら付け入る隙はある。彼女に攻撃する手段が本当にもうないのかは疑わしいが、動く気配を見せない以上、やるしかないらしい。

とはいえ、厳しい状況だった。

絶え間なく石が猛襲されるのを防いでいる状態から、更に新しく相応の祈力れいりょくを用意するのは困難を極めるだろう。まして、ユーリイの様子を監視しながら、祈力れいりょくを繰り出すのに不調なこの時に、その作業を行わなければならない。

腰を落とした状態でウエンは、左腕から出来うる限りの力を絞り、徐々にその祈力れいりょくを増量させる。湧き出る汗水が止まらなかった。

視線を落とさず、体を常時揺すられながら、片手で精密な操作を繰り返す。

あまりに険しい分業を、気の遠くなる程の時間が過ぎるまで続けた。

「はあー……はあー……」

そして、疲労困憊カスミに陥りながらも、傍らに大岩の霞カスミが出来上がった。それを認めたユーリイは、笑みを浮かべて動き出す。

円の盾を解除し、その矛は忌み子の周りを泳ぎ始めた。敵の気が逸れたのか、こちらへの攻撃が甘くなり始めた。

最初からそれで援護しろと文句を吐こうとしたが、どうせろくな答えが返ってこないと悟り、溜息を代わりに吐いてこちらの仕事に集中する。最も有効な武器は、ユーリイの戦い方が参考になった。

霞カスミを忌み子の上へと移動させ、特殊な器に水を入れるように、命を絶つ凶器へ段々と形を変える。

完成したのが、先端を細く円錐状に尖らせた巨大な槍。真下に標的を狙えるよう位置と向きを調整させ、

高速の回転をかけ、投げ落とす。

貫通力をより高めた槍は、星が落下したかの如く、灰色の忌み子を貫いた。

意思を失った瓦礫群が一斉に墜落する。それに伴って、断末魔や呻き声を一切上げずに崩れ落ち、地面へ倒れ伏した。

ウエンは祈力れいりよくを解いた後、両膝をついて荒く呼吸する。
なんとか、乗り切れた。そう心に安堵を覚える。

「おー？」

離れた位置にいるユーリイが、額に手を翳かわしながら倒した相手へ近付いた。

「なんか人の原形が見えてきた」

「え……」

その言葉に反応し、急いで立ち上がって駆け寄ると、徐々に祈力れいりよくが消え去り、元の色へ戻っていく遺体を見た。

腹部に穴が空いていることを除けば、普通の人間の女性——、浮かんだ感想はそれだった。とても先ほど戦った忌み子とは思えない。

体から離れる祈りイを視線で追ってみると、砂煙のように空へ舞い上がり、自然と消えていった。

「どうやら、あっちが忌み子の本体っぽいね」

「……どういう事？」

「あれはいわば思念。暴走してしまった祈力れいりよくで体が壊れちゃって、その意識が祈力れいりよくそのものに移っちゃったんだと思う。で、その祈力れいりよくが全く関係のないこの人の体に移り、意思のないまま暴れていた、って所じゃない？」

再び、遺体の女性へ目を向ける。

見るからに悲しげな雰囲気きんぎを漂わせていた。

忌み子がなぜここに居座っていたのか、分かった気がする。

恐らく、理由はない。

変異は、祈力れいりよくみならず人格までも豹変する。

その前に行った行動や周囲の影響は、当の本人にとっては別人の所業になる、という事だろう。

意識を持たない者だからこそ、何でもないこの場所を陣取っていた。

忌み子にとって変異とは、まさしく自分自身を失う、避けられようのない現象。

ウエンは、ユーリイを見た。

考えている間に帰路につこうとしていたのか、既に歩き始めていた。

その姿を眺めていると、

いつの間にか、祈りが滲み出るように放出していた。

徐々にそれは全身を浸していき――、

少年の視界を覆っていく。

濃紺の祈りは、ウエンを完全に呑み込んでいった。

そこに、

ユーリイが、懐から素早く得物を取り出し、手にしていた武器を放り投げ、力強く地面を蹴る。

たった今祈りに包まれた忌み子へ、猛速度で向かっていく。

その速さを乗せたまま――、

首の箇所を刺した。



ボウは、楽しそうに語った。

「生まれて間もない忌み子は未熟な段階だ。そいつに祈力を使わせ、心理的に追い詰めると、変異が早く起きる傾向になる。爆弾はさつさと起爆させたほうが扱いやすい」

「この数日、俺とユーリイでウエンを板挟みの状態に陥らせ、訓練と称して祈力を行使させた。余計に普通の人間としての感情を持つてる分、相当参っただろう。トンセンの道中も続けるがな」

「変異の前兆として、その者には明確な変化が訪れる。最たる例が、祈力を出すのが不調になっている状態だ。で、そうして変異が起きてだ、その祈力が何になるかを見極める必要がある。トンセンの忌み子のように、害しか撒き散らさない類のものなら――、ま、後の言葉は要らんだろ」

「狙うとすれば、まさに変異の瞬間だ。全身が祈力に侵食された時、それこそが、付け入る隙の現れ時だからな」

12 真意

語り終え、古ぼけた一室に無音の空気が流れた。

「……うん。よくわかったよ」

やがて、それを座して聞いた者が声を発し、静かに立ち上がる。

「貴重な体験どうもありがとう」

ウエンは、床に腰かけたままのボウを、見下ろした。



「——えっ？」

ユーリイは、啞然とする。

眼前の忌み子へ、深々と刺し出す筈の右手の先は、周囲を纏う祈力れいりよくに触れる程度で止まった。

急速に動き出した紺の霞カシミにその右腕を縛られ、先ほどまで加速していた彼女の勢いを殺されたからである。

まるで、意思を持つていたかのように。

前腕を抑えている霞カシミが、上腕と関節が曲がれない方向へ動き、

察知したユーリイはそれに沿う形に移動を試みる。

が、直後に祈力れいりよくは逆方向へ転換し、少女の体は片腕に引つ張られ、宙に一瞬浮く。

その瞬間、自由を奪われたユーリイの上から、胴体を包み込む新たな祈力れいりよくが被さられ、そのまま地面に叩きつき、凹凸の破片が周りに飛び散る。そしてその祈力れいりよくは五体へと広がり、ユーリイは仰向けの状態で拘束される形となった。

「……あつれー？」

彼女がそう呟いたと同時に、少年に包まれた祈力れいりよくが徐々に引いていく。

そして、ウエンの素顔が現れた。

特に変わりのない様子で、下目にかける。視線の先にいるユーリイへ右腕を向け、そこから祈力れいりよくを用いり捕らえていた。

ウエンが口を開く。

「今、どんな気持ち？」

「あれ、意外だなーって感じ」

ユーリイは軽い調子で答えた。

「こつちの思惑、完璧に分かってたとしか言えない動きだった。一体どうやって知ったの？」

「……」

ウエンが無言で応じると、

「あ、分かった」

ユーリイは晴れやかな顔を浮かべた。

「ボウに穢^{ケガ}レで操って、それで聞き出したんだ」

「……」

「それしかあり得ないんだよ。作戦の詳細なんて他に残してないし、ボウが裏切ったとしても得がないし、ここ数日だけしかないウエンが、情報不足の状態で推測するのも無理あるから」

「的中されたのをおくびに出さず、冷静に返す。」

「穢^{ケガ}レで忌み子は操れないって言ってたのはユーリイ。それはどう説明するつもり？」

少女は明るく振舞った。

「んー、方法までは流石になんとも。でも、あのボウだからさあ。愚図で、頓馬で、私が生まれてくるまで他の忌み子への対策も大してしていなかった、適当さで人格固まってるあいつから聞き出したっていうなら、そこまで不思議に思わないわ」

「……そうだね」

そうさせたのは自分とはいえ、得意げに機嫌よく計画を明かしていたあの男の顔は、傍から見て滑稽なものだった。

「やっぱり操ったんだ？」

息を吸って、事実を述べる。

「そうだよ。ユーリイと二人でぼくを嵌めようとしていたのを、ボウから無理やり聞き出した。それで、変異する祈^{れいりよく}力の動きを見せれば、ユーリイはぼくを狙う。そこを注意して観察すれば、捕まえるのは難

しくないって思った」

ウエンは、左手を上に向けた。

「ボウは今も操っていて手の中にある。そつちに勝ち目はない」

ユーリイは、納得したように口を開けた。

「ああ！ ウエンが今日祈りの調子が悪かったのって、変異の前兆じゃなくて、苦手な穢レを使い続けてたせいかな！ なるほどね」

何度も頷いている少女をウエンは眺めた。

与える情報は選別している。ここまではいい。

知られたくないのは、自分の過去である。

母親が森の中を逃げ回っていた頃――。ウエンは母体にいた時に傷を受け、追っ手を取り払う為に祈力を行使し、結果、精神と力を消耗された事になった。

その後、全身が紺色に侵食され、祈力が不調になった事も考えれば、推測できるのは容易かった。

あの瞬間に、変異が起きていたと。

つまり、自分には人格も祈力も今後変わる事はないと思つていい。

そしてもう一つ、相手に伝えない出来事がある。

ユーリイは笑みを抑えた。

「で、実際どうやってボウを操ったの？」

「自分で考えれば？」

冷ややかに返す。現状、こちらが圧倒的に有利ではあるが、不必要な情報や、反撃の暇を与えるつもりは無かった。

少女は面白くなさそうな表情を浮かべる。

「ふーん……。じゃあ、今こうして私を捕らえたままで、ウエンは今何をやろうとしているの？」

ウエンは、はつきりと口にする。

「カンラの人たちを、ユーリイの穢レから開放して」

「……へえ？」

少女は、見るからに落胆した。

「すぐに殺さないで何をするかと思つたら……。あのねえ、そんな事したらあの町無防備になるんだけど。わざわざ他の餌食にされたい

わけ？ 正しい事やってるつもりだろうけど、むしろ破滅の道に進んでるよ？」

「町は、ぼくが守る」

堂々とした声色で答えた。

「当然、刃物とかは取り除いた後で開放させて。もうお前らなんかの好きにはさせない」

「はい、解放しましたって私が言っただけ、それをどう確認するの？」

「ぼくが操っているボウに確かめさせる。ついでに防衛もあいつにやらせる」

「それで、ボウを操ってる事をわざわざ口にした訳か」

「はー、と関心するように息を吐いた後、ユーリイは呆れ顔で尋ねた。

「じゃあもう一つ。タオとチュンの間に何があったかは聞いてるよね？ 他にも同じように、滅茶苦茶複雑に入り組んだ境遇の持ち主が大勢いるわけ。私が生まれる前にボウが皆を雑に扱っちゃったもんだからさ。今は私の手でその記憶を忘れさせて。解放したら間違はなく該当者の全員が発狂するよ？ 絶対今の状況を維持した方が最善だと思うんだけど」

ウエンは、放出している祈りイに力を入れる。

「適当言いな」

ユーリイの体は、彼女自身の祈力れいりよくによって強化されているらしく、傷を負わずには少しの時間が必要そうであった。

「僕は、このまま握り潰しても構わない。散々利用されてきたわけだし」

「……」

徐々に締め付ける力を増してやる。妙な動きを見せたら即刻破壊するつもりだった。

短い無言の間が続き、

「聞きたいんだけど」

最初に破ったのはユーリイだった。

「なんでボウみたいに、穢ケガレを私に使わないの？ そっちのほうが絶対手っ取り早いでしょ」

「……」

確かにそれも考えてはいた。だが、唯一の懸念があった。

休憩所の時、塊に穢^{ケガ}レが混じってしまい、発狂を起こした一件。

目に映ったのは、他者の祈力^{れいりよく}が混じってしまおうと予測不能の動きになると思しき事例だった。

ここでユーリイの祈力^{れいりよく}に、自分の穢^{ケガ}レを入れてしまおうと、カンラの人たちはどうなってしまうのか。そこだけがどうしても気がかりではある。

しかし、ここで尻込みして、相手に付け込まれる隙を晒されては台無しだった。

「どうしてもやらないうっていうなら、ここでユーリイを殺して、その後じっくり町を見ていく」

できる事なら、安全の為に穢^{ケガ}レが無くなるのを完全に見届けてからが望ましかったが、場合に依じて強硬手段もやむを得ないと考える。

「わー怖。やろうとしてる事、悪役まんまじゃん」

ウエンは、冷静だった。

「そろそろ、早くやって」

次の返答次第でユーリイの処分を決める。

「……」

沈黙の後、ユーリイは嘆息を吐いた。

「私さ」

続けて投げかけられた言葉は、およそ場にそぐわないものだった。

「物語を楽しむ時、整合性を重視しちゃうんだよね」

「……」

「どんなに面白そうな展開とか設定とかあっても、矛盾や違和感があると、異物が入り込んでみるみたいで気持ち悪い。現実でもそう。全部の物事に、納得のいく合理的理由がないと、途端にくだらなく感じるんだ」

静かな眼差しのまま、彼女は言った。

「私はね、ウエンを殺す気は元々なかったの」

少年は、眉を寄せる。

「さつき君に突こうとした武器、よく見なよ」

目配せをした少女に、警戒を緩めず慎重に視線を移す。

少し離れた横には、一つの破片の上に、短刀の鞘が落ちていた。祈力れいりよくによって正確な感触は掴めなかったが、防いだウエン本人が把握していた為、確かに先程ユーリイが使用していた得物である。そこから少し遠くを見ると、薙刀の二本と抜き身の小刀も発見した。

「殺そうとしたなら、最初から矛で斬りにいったよ。あえて鞘で喉元狙った後、首筋と鳩尾に打撃を入れて無力化させるつもりだった」
ウエンは、目線を戻す。

「なんでこういう事したかっていうと、戦力が一つでも必要だったから。こここの忌み子みみたいになっても使いようはいくらでもある。

——次の戦いくさが始まるからね。ボウを、ちよつと外出させてみ」

それを見た少年は、ずつと神経を集中していたボウの感覚に、微かな違和感を抱き始めていた。

依然として苦手な穢ケガレの為、朧げな意識を拾うような形になっていた。

予感がし、ボウを家の外に出す。そこに現れたのは、

町中が、異様な緊張感に包まれているような感覚。

視覚や聴覚を共有する事は叶わないが、更に細かく読み解こうとし、徐々にその様相が明確になる。

その答えが判然とし、

「……………え!?」

ウエンは驚愕した。

「……………町中が、戦ってる……………」

意識が、現実へ戻る。見上げる少女の顔がそこにあった。

「そう。今、カンラは攻め込まれているの。反対側から、シャーネに」
頓狂な調子を戻したユーリイに、問いかける。

「何で……………? 見張りは!?」

「警備はあえて今日だけ緩くしてある。そこを、ついさつき完全に引き払わせた。で、そこをシャーネの連中が敵襲にきたってわけ」

「……………いや、おかしい! いくらなんでもそんなすぐ襲えるわけない

！」

「できるよ。情報を一瞬で伝達できる、向こう側の諜報員がいればね」
ユーリイなら、すぐにそれを看破できる筈、そう言おうとしたところで、気付いた。

「……わざと?」

「その通り。向こうの忌み子はずっと襲撃の機会を伺っていた。そこを利用しようと考えたの。あえて情報を少しだけ与えてあげて、こっちは万全の状態で待ち構えてやろうってね。ちなみに、ウエンも会った、鬼のお面の人がそうだよ」

にわかには、信じがたい内容だった。

「だから、今私を殺したり、穢^{ケガ}レから解放させちやうと、カンラはあつという間に全滅しちやう。せつかく町を守ろうとしていたのに、そんなの、ウエンは嫌でしょ?」

「……っ」

ウエンは睨みつけ、祈^イりの力を強めた。

みしりと、骨が軋む感触を覚え、ユーリイの表情が歪む。

限りなく低い声を浴びせた。

「だから? それでぼくがこの手を止めると思った? なんでもかんでもお前の思い通りに、なると思うな!」

少女は、笑みを崩さなかった。

「……あつ……そう。ならいいよ。……殺せば? こっちには、その気は無かったけど」

絞り出すような声で続ける。

「このままっ……、手を下せば、君の道理は……、その程度だったって、私が、失望するだけだから。……やりなよ」

忌み子の二人は、互いの視線を受け止めた。

静寂が灰色の場を支配し、時が流れる。

そして――、

ウエンは、捕えた析^{れいりよく}力を使い、

ユーリイを左横へ投げ飛ばした。破片を撒き散らしながら倒れこんだ彼女へ、冷淡に命令する。

「早く準備して」

体に手を当てながら、少女は立ち上がった。

「いたた……、あーあ、傷ついたなー。色々」

短刀と薙刀を拾い、向かい合う。

「じゃ、参りますか。今は私の兵達が食い止めてる段階だから、まだ十分間に合う」

次の目的を定め、二人は走り出した。

「問題は、ボウなんだよね。あの恥知らずが戦力になってくれればいいんだけど」

「ユーリイこそ。さっきだって、『私も必死に戦ってて、人々を操つてないと不安になる』ってきとー言って、ぼくに罪悪感与えようとしてたのも、すぐくおかしかった」

「やだー。恥ずかしいからやめてー」

少女は、顔を赤らめた。

第三章

13 謀略

「ユーリイ、今の状況はどうなってるの？」

鈍色の町を抜け出て、草地へと駆けるウエンは走りながら訪ねた。ボウに確認させる事も試みたが、カンラの実態を細かく把握するのは今の力量では難しい。加えて、彼女から『ある事』を頼まれていたのだ。

「まだ大きな戦にはなっていない。あちこちで小規模のやり合いを始めてる感じ。向こうも様子見してるっぽいね。でも、その内に町同士による、大規模の総力戦になってくるよ」

ユーリイの返答に内心安堵する。一刻も早く加勢に行きたい身として、時間を置いてくれるのはありがたい戦況だった。

「このまま持ち堪えてくれないかな……」

少年がぼそりと呟くのを意に介さず、

「できあ、ウエンに一つ聞いていい？」

先頭を走るユーリイは、振り返らずに問う。

「君の出生のシャーンネ。あの町のことどう思ってる？ これから相手するわけだけど」

「……」

実際、痛いところを突かれていた。殆ど関わりがないといっても、本来なら、立場が逆になって戦う事になっていたかもしれないのだ。しかし、ここで気持ちが揺らいでは、それこそ一貫性がないとウエンは思う。

「今は、お世話になってくれたカンラの町を守りたい。だから、迎え撃つ覚悟はできてる」

可能であれば、人命を絶つことなく戦を終えたい。向こうの兵達もまた、忌み子に操られた被害者なのだから。

だが、状況次第ではやむを得ないだろうと弁え、腹を括るしかない。

「ふうん……」

「……？」

ウエンは首を傾げる。

何故かは分からないが、いつもの反応とは違う含みを感じた。が、すぐに今向かっている町へ意識を向ける。

あちらでは、何が迫っているのだろうか。

「ユーリイの指示通り、ボウを表に出してないけど……、本当に大丈夫……？」

少女が提案した内容を正確に表すと、ボウに祈力れいりょくを出させず、忌み子である事を晒されないように、という指示である。

その意味には理解ができた。ここで第三の忌み子が敵陣に知られると、撤退される可能性が高くなるからだ。そうになると、今はそれで凌げたとしても、対策を取られ、後々こちらが不利になる。今回のような作戦も通用しなくなるだろう。

正直言つて、それでもあえてその姿を曝け出し、被害を生まないようにするべきか、今も悩んでいる。しかし、そうするとユーリイが周りの住人を使つて全力で止めにかかるのは目に見えていた。カンラの人を傷つけたくないし、その内乱の隙を敵に狙われでもしたら笑い話にもならない。ここは一先ず、足並みを揃えておく方が無難に思えた。

ユーリイは、自信を顕わにした様子で言った。

「見くびってもらっちゃ困るなあ。私の頼もしい同胞達だよ？ 任せとおきなつて」

カンラの青い上空に、黒煙が幾つか立ち上っていた。

至る所に火事が起こり、群衆に混乱を巻き起こす。

騒乱の元となる原因は、町中に紛れた数人の来訪者によるものだった。

屋根の上を次々と掛ける、俊足の狼の姿。

町民がそれに気を取られる中、影に潜み、事を進める隠密者おんみつもの。

奇声を上げながら、手の凶器を振るい回す狂乱者きやうらんしゃが複数。

民衆は逃げ惑い、あらゆる場所で人々の波が押し寄せていった。

狂騒が狂騒を呼ぶ中、事態を防ごうとする者が、闖入者を排除するべくそれぞれの前に立つ。

筋骨隆々な大男が、周囲の家屋や松木を棍棒で破壊し、蹂躪する様を、

「……」

武装を整え終えたタオが眺めていた。

タオは腰を落とし、手に持った刀を相手に向けたまま、肩の位置まで上げて両手で構える。

大男がこちらを補足するや否や、棍棒を横に広げたまま突進する。周辺の木柱や立て看板を巻き込みながら、勢い削がれる事無く迫ってゆく。

体格差は歴然としており、剣士より五割ほど増している巨軀——それが持つ得物の射程内に入った瞬間、腰を乗せた払いが、標的を砕かんとばかりに繰り返された。

対してタオは、その姿に畏怖しながら、しかし目は逸らさず、刃先を相手の首筋へと狙う。

彼は、戦いが長引く分だけ不利になると悟っていた。

大男が棍棒を振るうのと同時に、剣士は決死の覚悟で前へと地を蹴る。

そのまま、刀は相手の喉元を突き刺した。

しかし、棍棒も自分の胴元へ打擲し、タオは右横へ吹き飛ばされ、壁へ激突する。

大男に致命傷を負わせたのが先だった為、多少棍棒の勢いが弱まり、加えて、装備した防具も相まって、剣士は一命を取り留めた。

だが、大きな損傷を受けたのに違いはなかった。衝撃で肋骨にひびが入った部分に手を摩る。本来ならば動くのも困難な筈の傷病だが、

タオは立ち上がった。

ユーリイの祈りによって傷が緩和され、痛みが僅かながら徐々に引いていくのを感じた後、横向きに倒れた大男に近付き、首に刺したままの刀を引き抜こうと柄を取る。

瞬間、腕を掴まれた。

その甚大なる膂力^{りよりよく}は、命が尽きようとする寸前ながら些かも衰えておらず、抵抗間もなく引き寄せられる。頭頂部を掴まれ、地面へと叩き込まれた。

そして倒れ伏したタオの身に、瓦を粉碎する威力の打撃が、嵐の如く見舞われる。

一撃一撃打ち下ろすごとに、体を通した地面の石畳に亀裂が入ってゆく。

虫の息となったタオへ、止めとなる拳を振り上げ、

大男の腕が斬り飛ばされた。

暴行者が背後へ振り返ると同時に、その首も胴体と別れた。

たつた今加勢にきた剣士は、横に払った刀を鞘に戻し、隣に倒れている瀕死の男へ歩む。

見るからに重体そのものといったタオは、

床に両手をつき、のっそりと起き上がる。自身が負った傷は全く意に介さない様子に見えた。

それを確認した増援の男は、次に行くべき騒ぎとなっている位置を告げると、走り去った。

タオは、先刻まで戦っていた大男の元まで移動すると、斬り落とされた首の位置より下、そこに刺さったままの刀を引き抜いた。

自身と敵の血が地面へ零れ落ちる中、

剣士はよろめきながら、目的の場所へ向かった。

一方、カンラを挟んだ両側の山――、

その森林の中には、数百の伏兵が忍んでいた。

町に送り込んだ数人の刺客は、陽動や囷を兼ね、大きな混乱を招かせる役割が主である。

全ては、山のあらゆる位置に配備させ、一斉に挟撃をかけるその瞬間の為。

日の下の枝葉や土中等、巧妙に隠れたまま彼らは息を潜めた。いずれも、現在町に降りている者より、更に腕が高い兵が揃っている。

突如、笛の音が二度、風を切った。

それを皮切りに、合図を聞き届けた両側の兵達は野良猫のように素早く山を下り、

「カンラへ急速に距離を詰めていった。

森を抜け、更に一步を踏み込む。」

「……我慢できない！ やっぱりボウを使って町を守らせる！」

ウエンは走りながら、悲痛の声を上げた。

「もー、落ち着きなつて」とユーリイ。

「だって、どれだけ町の皆が強かったって、囲まれて一緒に攻められたらまずいよ！ 両隣にある高所の山からだったら、なおさら！」

「そんな事分かつてるよー」

少女は顔色一つ変えなかった。

「いい？ まず向こう側は、私達に一切存在がバレてないって思い込んでまま、意気揚々と情報収集してたの。その情報は、全部私の管理下のもとに与えてやったやつ。伝えてないものもあるし、誤情報も混ぜてある。それで、相手に山から攻めれば確実に勝てるって結論を下せるように誘導させてあげたの」

ユーリイはふつと笑う。

「あの二つの山には、全面の全面に罠が張り巡らせてる。勿論、一見して分からないようにね。私の意志次第でそれは自由に発動できるの。しかも、向こうは山を調べる時間なんて全然無いから無警戒になつてしまうわけ。」

種類にもよるけど、かかった獲物はまず間違いなく、原型の五割以上は失うね」

14 群れ

最初に発動した罫は、地面より放たれた。町へ移動する敵軍の足元から、穂先が鋭く尖った槍が複数飛び出す。

その数は、一目では把握しきれないほど無数にあり、さながら降り注いだ雨が再び天へ還っていく光景だった。

群れは一斉に串刺しにされ、前線を分断される。

次に、山の中からの仕掛けが動いた。

山下へ下ろうとし、それによって無防備となった背後の斜面から、土が巻き起こる。

高速で吹き飛ぶ大量の石礫が、敵勢の背面を深々と抉った。

同時に、砂煙を漂わせ、それに含まれる、腐敗した死体と糞尿を混ぜ合わせた悪臭を蔓延させる。息を吸った者共の鼻を片端から抑え、動きを一時的に停止させた。

次に、つちのこのように生やしたままの槍やりぶすまと山の間、その位置の地面が低く落とされる。どすん、と鈍い音が辺りに響き、堀のような空間が町の側面と同じ長さまで広がっていた。

八方塞がりとなったそこへ、高所から勢い良く転がる、幾つもの大岩が迫っていく。

障害となる筈の木々は丁寧に無くなっており、坂道を走る岩を阻むものは、何一つとして存在しなかった。

かくして、これらを初めとする数々の罫の餌食となり、シャーネの敵陣の四割程を削り落とした。

「うん、上々。いい感じにかかってくれてる」

ユーリイの満足げな報告を聞き、ウエンは思考する。

罫を作動する時、ある程度の間を置いたのはボウを表に晒さない理由と同様、敵に撤退させない状況に追い込む為である。

肝となるのは、最初の部隊をあえて町へ突入させる事だ。後に続く兵隊の戦力を削げば、先に入った前線のみが町に残され、その瞬間が

絶好の的となる。

「この為に、あたかも町中に混乱が起きたように見せて、最初の侵入者に苦戦を演じさせたからね。もうここまで来たら、相手も退くに退けない筈だよ」

「……」

確かに、話を聞く限りは順調に進んでるように感じる。

敵の視点に立てば、二人の忌み子がカンラにいない事を確認している以上、今を以って攻め込むしか道は無いと考える。この状況でシャーネへ引き下がっても、戦力の大半を失った状態では、他の忌み子に狙われて破滅するのも時間の問題だろう。

ならば、ここで一筋の望みに賭け、あわよくばカンラの町民を頂こうとし、侵攻の手を緩めない、という考えに至るのは自然な流れだと理解できる。

だが、本当に大丈夫だろうか、とウエンは訝しんだ。

「ユーリイ。シャーネの忌み子はどんな『特色』なの？」

「んー、うん。ちゃんと話すよ」

少女は、神妙な声色で言った。

「心して聞いてね」

その全貌を耳にしたウエンは衝撃のあまり、声を漏れずにはいられなかった。

「なに……それ……？」

土中から放たれた罫によって分断された一部の兵隊が、それに構わず進行し、塀を軽々と飛び越え、町へ侵入する。

伴って、牙を隠し通したカンラの傀儡達くわいが、本格的に動き出した。

ある者は屋根上に昇り、ある者は川の水上で、

女性、老人、児童に至るまで、それぞれの強みとなる武器を手にし、侵入者と相向かう。

鎖鎌で健脚の二足を落とすし、

弓矢で屈強な胴体を射抜き、

刀剣で祈りを纏った生命を斬殺する。

獲物を仕留める、カンラの民草の動きや連携に一寸の乱れは無く、肅々と敵対者を排除する様は、蟻の行進のように正確だった。

町中に血が乱れ飛び、所々に赤色の模様が新たに付け加わる。

序盤の敵の層は薄く、第一波の襲撃を迎え撃つのは比較的容易といえた。

問題となるのは、次の第二波である。

この時点で壊滅的ともいえる被害を受け、なりふりかまわず突っ込む（つまり大して変わりはない）だろう次の段階からが本番だった。

可能なら、この時点で相手側の忌み子を見つけ出せば、今後の戦局を握れる僥倖になる。だが、カンラの内外を町民全ての視界で見渡しても、特定は未だ果たせなかった。

もつとも、ここで相手の忌み子の命を絶てばその時点で終戦となるのだから、潜伏に徹するのは当然といえば当然だろう。

しかしながら、今まさに、悪臭に塗れたまま襲撃に来る、明らかに数が多い第二陣の内にいる可能性は高い。

その大規模からして、敵陣営のほぼ全てを集中させている事が窺い知れ、今度こそ総力戦となるのは確実であった。

遂に、軍団が双方向から町中へ侵襲する。

戦場は更に、より凄惨な光景を広げる事となった。

流れ自体は先刻と同じ、戦闘人形と化したカンラの兵員を総動員して迎え打つ形となる。

最初の襲撃と違う点は、相手側の戦力の差であった。

とめどなくなだれ込む敵の波――、カンラの住民はそれらに応戦しつつ、あえて内部への侵入を許す。

本来、自軍の領域内を侵された状態というのは極めて不利な戦局だが、今回に限り例外となる。

例えば、タオは現在、複数の味方をつけ、敵一体を相手取っている。絶え間なく攻め込む為に、攻撃する役と離れて様子を伺う役を、交代で変わりながら戦う。その観察する役を、タオは請け負っていた。

じつと相手を眺め続け、その状態から、タオは全く別の方向へ飛び

出す。

向かう先は先ほどまで見定めていた敵とはまた違う敵へ。絶妙な隙を狙われたその標的は思いもよらぬ攻撃に虚をつかれ、成す術なく果てていく。そしてまた別の敵を始末するべく、他の味方と合流し合戦を広げる。

ユーリイの完全指揮下にある、行動の狂いが全く生じない兵団の上に、敵味方それぞれの位置を、全員で把握し共有する事が可能だからこそとれる作戦である。故に、敵と戦いながら深部へ誘導し、相手側の戦力を分散しつつ、こちら側は戦鬪を複数展開させ、更に別の局面から有利な状況で連携を促す事ができる。

極論、このカンラとシャーネの戦争は、多対多ではなく、多対一を無数に繰り広げているといっても過言ではない。加え、ユーリイの『特色』により、一人一人が残らず、人間として最大限の性能を発揮でき、どれだけ異常な事態が目に移っても一切動することなく戦い続けられる。

この戦法こそが、カンラが織り成す最大戦力である。
しかし、通用しない相手も当然存在する。

人の手による攻撃が根本から通じない輩——、タオ達が現在相手にしている敵が、正にその典型だった。

刀剣、弓矢、槍、斧、その全てが弾かれる。

タオは、目前の相手を見据えた。これまでと違う、一筋縄ではいかない難敵だと悟る。

堅牢な身で攻撃が通らないならば、高所からはどうか——。

周りが牽制を促す間、剣士は手近な建物の屋根上へ、石灯籠を伝つて登った。更に高みを目指し、近くにある鐘楼しやうろうの上まで移動する。

同志がそれを見ずに確認し、鐘楼の近くまで相手を誘導させながら奮闘する。

タオは武器を逆手に構え、腰を落とした。

標的が目標の地点に招いたのをみて、恐れをなさずに跳ぶ。周囲の味方は巻き添えを避けるべく、敵から二歩ほど離れた。

浮遊感が剣士の身に漂い、風を切る音が耳を響かせ、運命を託すは

ただ一刀と、腕先に力を込め、得物を縦軸に支える。

しかし、落下中、全く別の横方向から衝撃が走った。

タオは吹っ飛ばされ、微妙な角度で壁へ衝突し、周りにある小物を崩して落ちていく。

衝撃の正体は、この場に現れた新たな乱入者、狼だった。

狼は、追撃を加えんと、四つ足で地を蹴る。

倒れたタオの元へ届こうとする寸前、

霞カシミの大きな壁が、両者の間に落とされ、狼は濃紺れいりよくの祈力れいりよくに触れる前に急停止し、数歩引き下がる。

ウエンは、上空から降り立った。

即席で築いた壁を手元に戻し、地面へ適当れいりよくに祈力を流しておく。狼を目にしたウエンは、

「……」

呆然と、小さく口を開けていた。

その狼は、人の面影が垣間見えており、しかし確実に人でなくなつた姿形を表していた。

人面をそのまま張り付けたかのような面様だが、顎が顔の半分以上を飛び出している様が人の認識を妨げる。裂けるように口が開き、半楕円状に並んだ歯牙が見えるが、更になんかその中を、細く鋭い針が上下にびっしりと敷き詰められ、それを口内で洗浄する役割なのか、無数の細い舌が蠢しぐくいている。全身は濁った紫黒色に染まり、四肢は大樹の根のように太い。両前足の鋭く大きい爪は手先と手首の二か所に備わり、そこに獲物を挟んで閉じれば容易く肉が削がれる事だろう。

「……」

警戒している人面狼じんめんろうの背後にも、こちらを凝視している者がいた。

それは、タオが先ほど狙っていた相手である、巨大な異形の怪物。

色は同じく紫がかった黒、人間を十人程集めて、その素材を適当に混ぜ合わせたような物体——、それが、率直に抱いた感想だった。

眼球は満遍なく全体に埋め込まれており、上に粟を剥いたような大きな口が割られ、四十本の長い手足は、奇怪でふとましい胴体を卓のように支え、ハリネズミのように幾つもの鋭い突起物が周囲へわらわ

らと伸ばしている。

「ひ……」

ウエンが思わず声を漏らすと、物体は別の兵士に気をとられ、体全体を回して猛威を振るい始めた。

「うーん、一撃くらい加えたかったけど、狼が思いのほか速かったな。流石に甘かったか」

少年の隣に立ったユーリイが呟く。

それを見た人面狼じんめんろうが動き、再び屋根上へ跳躍する。自慢の脚力で、あつという間に遠くへ移動した。

ウエンは、その視線の先を追うと、視界に別の戦いが姿が入った。

「ユーリイ……、あれって……」

少年が見たのは、カンラの町民と、人とは呼べない、何かの生き物が無数。

一匹は、何分割も分けられ、大きな百足となった蟲が這いずり回っている。

一匹は、腐海のように怪しげな原生林が頭部を中心に生い茂る中、突然爆発が起こり、紫の胞子をばら撒く直立歩行型の植物。

一匹は、全体が針金のように細長く巻いている体。

一匹は、異常な程に増えた骨が露出しており、それが鎧となって胴体を覆う。

一匹は、肌が一切見えないほど臓器を剥き出し、全く得体が分からない少量の液体を精製しているらしく、出来上がったそれを周囲にぶちまけている。それに付着した床や木々は、腐食して溶けていった。

一匹は、一匹は、一匹は、一匹は、一匹は――、

「さっき言った通りだよ。シャーンネの忌み子の『特色』は、人体改造だって。普段もあの姿で日常を送ってるっていうんだから、驚きだよねえ」

「……そんなのって……」

直前に聞かされた情報を持っていても、目の前に広がっている光景が、とても信じられなかった。人の形を微かに保っている分、トンセンの塊より更に悍ましく感じる。

「今までで、直^{じか}にシャーネの民衆を見たことないでしょ」
少女は、こちらを向いた。
「ウエン自身も、生まれは同じようなものだったんじゃない？」

15 放流

ユーリイは、遠くにいる人面狼じんめんろうと異形の物体を順繰りに見た。

「まあとにかく、あの二匹をどうにかしないと。他とは違って、並の人間じゃまず太刀打ちできないから」

「……っ」

思考の渦に入り込む前に、ウエンは現実には引き戻された。

少女は二本の薙刀を構えなおす。

「最初に、ウエンはボウを指示し直して。適当に離れさせた所で戦ってもらおう。あいつと連携入れるのだったから、現場をこの目で見るまで温存しておきたかったけど、もう必要ないから自由にしていよいよ。なんならウエンが戦いやすいようにボウを開放してやつてもいい。あの馬鹿でもこの状況を見てどう動くかぐらいは判断できるから」

「……」

「で、あの二匹だけど、狼のほうは私がやる。あの速さで動かれたら私ぐらいしか追いつけないから。ウエンはあの気持ち悪いのをお願い」

一瞬目を瞑り、一呼吸入れて考えをまとめ、返事を返す。

「わかった。どつちかが忌み子つて事で合ってる？」

「人体を変えられる以上特定は無理だけど、あれらが特に強いわけだから、可能性は高いね。当然、忌み子貧乏くじを引いたら苦戦する事になるし、両方かもしれない」

確かに、元々二人いた場合も捨てきれない。油断をするつもりは毛頭ないが、

何か違和感を覚えた。それは殆ど勘に近い根拠で、理屈で説明できないものだが、ここまでの町の戦局を見て、形用し難しい何かを感じてしまう。

自分達は、思い通りに作戦を進めているのだろうか。

「じゃ、頑張つてー」

ユーリイはそう告げると、早々に屋根上へ上り、人面狼じんめんろうがいる方向へ飛び去った。

それを見届けると、ウエンは夕オの方を向いた。

彼もまた、別の場所へ移動しており、丁度建物の角を曲がった所が目映った。

「……」

言葉を口に呑み込み、戦うべき相手へと体を向けた。

ユーリイの計らいなのか、戦っていた他の民衆は引き払っており、ウエンと一対一の状況になっていた。

改めて敵を観察してみる。着目すべきは体全体にびっしりと生えた棘だろう。

試しに、斜め上空から少量の霞^{カスミ}を物体へ飛ばしてみる。

標的へ近付いた霞^{カスミ}は、近くの部位にある複数の棘が高速で伸び、交差して刺された。力を失った紺の祈力^{れいりよく}はそのまま消えていく。槍と化した突起物は、再び雑草程の元の長さへと即座に戻った。

あの伸縮自在の凶器にも、祈^イりの力が入っている以上、無防備に近づけば、串刺しどころでは済まないだろう。

もし、先ほど夕オが上からの急襲に成功すれば、そのまま惨憺たる被害を及ぼして命を落としていた事になる。

ウエンは憤りを覚えた。やはりどう言い繕っても、人間に対しての扱いを変えるつもりが無いことは明らかだった。

たとえこの事を咎めたとして、ユーリイは必ずしも死ぬとは限らない、仕掛けなければ更に大勢が死ぬ事になる、とでも雄弁に口を動かすのだろう。

……今は目の前の敵に集中するしかない。彼女についてどうするかは、この戦争が終わってからだ。

ウエンは、相手の次の行動を見た。あの敵の脅威となる要素はまだ幾つもある。

数十本の足で屈み、物体は大きく跳んだ。その巨体に見合わない動きの速さで、少年の上を悠々と通る。

ウエンの真上の位置で、物体は底面の皮を引き裂き、そこから粘液を大量に落とした。事前に体外に練った祈力^{れいりよく}で上方に壁を創り、前へ移動して回避する。

液を浴びた霞カスミの屋根は、氷を炎で溶かされるように崩れ落ち、少年の元いた場所を紺と紫が混じった色で侵し尽くされた。

獣のような俊敏さに、触れた対象をたちどころに溶かす毒液。なかなかどうして厄介である。

少年を飛び越した物体は着地し、その場で半回転しながら小さく飛び、こちらへ振り向く。

相対した二者は次の行動を開始する。ウエンは祈力れいりよくを練り、奇怪な体である敵は、更に変形を始めた。

全身から伸びている無数の棘がある一か所に集まり、一つの巨大な形あるものに変化する。伸縮のみならず体外での移動も可能らしい。

出来上がったそれは、細長く伸びた棘が一本の筋となり、数百に及ぶその筋が束となって一本の強靱な腕へと変容した。

前腕と上腕、三本指から成っており、大木のように逞しいその腕を天空へ伸ばした様は、まさしく樹齢を重ねた大樹と見紛う。

そして、短い間を置き、その巨木を倒して横へ振り回した。

周囲の建築物をもともせず破壊し、暴れ狂う。その光景は、通常の腕で雑草を薙ぎ払う行為を、そっくりそのまま置き換えたようだった。

一瞬で警戒意識を上げる。あの腕の強大な臂力りよりよくは明らかに危険だ。

物体は、障害物を粗方潰して空間を広げた後、元来の敏捷性でこちらへ近付く。

「くっ！」

速攻で距離を詰め寄り、強靱な一本腕を振りかざした。ウエンは素早く、先ほどより分厚い盾を築く。

空気の流れを、強引に捻じ曲げられたかのような感覚を肌で味わう。

下ろされた打撃は、獣の猛突進と、隻腕せきわんから繰り出される剛力が合わさり、あらゆる創造物を破壊せしめんとする存在を意味していた。

やや斜めの角度から迫る巨拳——。悪寒が走ったウエンは半歩下がりが、盾を上への位置へ、垂直に立てた。

盾と衝突した拳は、力が下へ受け流され、そして轟音が響く。少年が先刻までいた位置に大穴が開き、霞の盾はひん曲がり、目鼻の先まで押し込まれた。

自分が辿ったかもしれない惨状を目にし、戦慄を覚えると同時、腕を伸ばしている相手の本体が、毒液を吐き出した。

量は小さいが、放物線を描くように盾の上を飛び越し、少年へと降りかかる。

直前でそれに気付き、回避を試みる。方向から見るに縦ではなく横でなければならぬ。

咄嗟に右へ飛びつき、直撃は免れたが、左腕の部分である、着物の袖にかかってしまった。

付着した袖はたちまち溶かされていき――、「うっ……ああああ！」

その下にある、前腕への侵食を始める。

とてつもなく熱く、気絶しそうな痛みが左半身を支配した。右手で抑えようとし、すんでで止めるが、苦しさがより明瞭になったかと思えた。

毒液の勢いは止まらず、このままでは焼き切れそうになる。液に触れた患部を、体の内側から祈力を盛り上げるように動かし排出する。

そこへ、物体による一撃が繰り出された。

盾から離れてしまった少年に、横払いの攻撃が直撃。家々の前を吹っ飛ばされ、小さな体が跳ねながら減速する。

「……うぐ……」

突進の加速が乗らなかつた一撃であり、尚且つウエンは瞬間的に気配を感じ、もう一度祈力を横に向けて集中した為、幾分軽い打傷で済む事ができた。

しかしそれでも、決して無視できる手傷ではない。溶液による火傷も健在のままだった。

よろめきながら立ち上がる所を、物体は間髪入れず、またこちらへ突っ込んでくる。腕を横に置いた状態で進み、それに巻き込まれて破壊される建物が目晦ましになっていた。

次も同じ手で防げるとは限らない。まともに喰らえば今度こそやられる。おまけに今、必要な量の祈力れいりよくを発するには時間が足りないだろう。

左肩をさすりながら、向かってくる敵を見据えた。

「……」

ウエンは目を閉じ、祈りイを操った。

瞬間、物体の腕が、乾いた音とともに小さく破裂する。

突然の異変に相手は困惑したのか、動きが鈍くなり、突進の速度が緩んだ。

先ほど受けた打撃——、防御をするのと同時に、ウエンはその腕へ、微量な祈力れいりよくを注ぎ込んでいた。その祈力れいりよくを用いり、腕を内側から張り裂けたのだ。

そうして生まれた隙に付け込み、ウエンは瞼を開け、全身から祈力れいりよくを放った。

、祈りイは、敵の元へと捧げられ、命を絶つ幾つもの凶器へと変化し、それが猛速度であらゆる角度から対象へ振るった。

両目に移った光景は、濃紺カズミの霞によつて、全身をずたずたに切り裂いていく物体の姿。原型となる欠片の眼球や肉片が、ぼとぼとと巨大な刃物から零れ落ちる。

勝負を分けたのは、自分が果たして、手綱を捨てられるか、にあった。

相手の体が細切れになり、動かなくなった事を確認すると、

「あつっ……」

思い出したように左腕に痛みを覚え、片目を瞑つて、液に触れた腕を触る。

結局、ユーリイの助言通りに従ってしまったのが腹立たしかったが、そうしなければとても勝てる相手ではなかった。自分にとつて穢ケガレが不得意というのは、なんとも複雑な気分でしかない。まさか制限を外すだけでここまで楽に祈力れいりよくを動かせるとは、自分自身でも想像できなかつたのだ。

……ボウへの穢ケガレを開放したことにより、その分の祈力れいりよくが自分の

元へ戻ったことで今回の敵は倒せた。しかしこれで、今度は奴が自由に動けてしまう。

事ここに至って、まさか妙な動きはしないと思いたいが、懸念材料を増やしてしまったのは否めない。仕方がないとはいえ、歯がゆい気持ちだった。

だが、それよりもまず考えるべき事がある。

周囲を見回すと、他にまだ戦いを繰り広げているのが確認できる。

それは、人々を操作する祈力れいりよくが未だ健在という事である。となれば、今倒した相手がシャーネの住民を操っていたわけではない。これは、改造されてしまった普通の人間。

「……」

本丸である忌み子は、別にいる。

ウエンは、ユーリイが去った方向を見た。

16 生体

人面狼じんめんろうは、連なる家々の屋根を、疾風のごとく駆け抜けた。四つ足を駆使して力強く寧猛に走り、カンラの町を足蹴にする。

しかし、その人外の脚をも上回る速さで追跡する姿が一人。二槍使の少女は、その小さな双脚で狼を追い縋っていた。

ユーリイは俊足の動きで瓦を蹴っていくが、距離は縮まらない。その要因としては、純粹に相手の足が多い分小回りが利く、殆ど速度を落とさずに不規則な道筋を歩むことができる、そして少女は長柄の武器を所持している為、移動に制限がかかってしまう点にある。

彼女も当然、このまま追いつこうとは露ほども考えていない。

一本の薙刀を空中へ離す。もう一本は逆手に握り直し、肩に担ぐ形で持つ。

そして、ユーリイは狙いを定め、二、三步を踏んで体勢を直し、全体を回して十分な力を乗せ、標的に向けて一本を投げた。

析力れいりょくで強化された身体によって放たれた薙刀は、音速を超えるかのような勢いで加速していく。

狼は、後方斜めから迫る刃を直前で察知したのか、凄まじい反応速度で体をひねり紙一重でかわす。薙刀は皮をかすめ、その先にある家屋の角の部分へ、刃と尾部の石突いしづきが露出する形で貫通した。

続けて程無く、第二撃の槍が襲う。

初撃と比べると速度はやや落ちてきているが、標的が回避に努めた為に体勢が悪く、静型である反りの少ない刃は、その筋張った胴中を貫かんとする。

寸前、狼は真上に跳躍し、刀は空をかすめ、二の矢の攻撃をも凌いだ。

わずかな間、獣は宙へと浮く。

そこへ、猛襲の少女が重なった。

彼女の真価は、人体を隅々まで掌握し操れる故に、一通りの武器を扱える所にある。乱戦用に（彼女にとって）適した二本の薙刀は手放しても、その手に握った一振りの短刀のみで獲物を狩る事が十分に可

能である。

ユーリイは、二本目の薙刀を投げた後、片足を全力で蹴り、狼の元へと移動。膝を曲げ体を丸めた状態で定めた相手へ急接近すると、短刀を振りかざし、

一閃を描いて首を落とそうとする瞬間、獲物が更なる反応を見せた。

こちらへ首を向き、針だらけの口を大きく開けて構える。

それを受けて、ユーリイは短刀の鞘を左手で瞬時に取り出し、相手の喉元へ入れ込むように突き出す。がちりと小気味の良い音を発して顎を閉ざされ、勢いを削がれた少女は、狼と繋がった軸である左手を鞘から離し、建物の上へ降りた。

相手側も同じ屋根に着地し、口を開けて唾を吐き出すように鞘を捨てる。その鞘を一瞬見ると、無数の細い針穴に、穴同士で繋がってできた亀裂が割れていた。

狼は威嚇するように針山である歯と牙を見せ、鳴き声を上げてこちらを睨みつける。

「やだやだ、怖い怖い」

事もなげに少女はそう呟き、小刀を刃のない片側でとんとんと肩を叩いた。

こうして間近まで迫れば、敵は易々とは逃げられない。脚の速さはこちらが勝^{まさ}っている上、もし無防備に背中を見せた瞬間、そこを狙えば仕留めるのは簡単だろう。

最も注意するべきは反応の速さである。

先刻の動きを見るに、その超反応であらゆる角度からの攻撃に対処できるのが厄介な点であった。加えて、常人を超える素早さと凶悪な歯牙が合わさり、通常の

民兵では到底及ばないのも当然ではある。

「ちよつといいい？」

ユーリイは左手を上げ、眼前の相手に突然話しかけた。

「おたくと組んで、うちの町人を全員殺してもらおう代わりに、そっちの奇人達がまとめて傘下に入ってくれる計画だったよね？　話が違

な—い？」

「……」

問いかけに対して、狼は無反応のまま、

斜め横から少女へ迫り、前足を上げてそれぞれ上下に備わった鋭い爪を開ける。

ユーリイはふっと嗤いながら、片肘を地につけて上体を横に浮かせ、軽々と避けた。狼はその動きに反応し、下にいる少女へ爪を振るう。短刀と左足に仕込んだ苦無を左手で引き抜き、金属と爪が幾度も交わった。倒れた少女の下からの蹴りを後ろ足で防ぎ、飛び越す。ユーリイは腹筋だけで立ち上がり、両者は今一度睨み合った。

見れば、人面狼の爪の中身も針が埋め込まれており、幾本の舌と粘りついた唾液が確認できた。手先にも口の役割を兼ねていたらしい。恐らく殺傷能力を高める為に、人体を変えた数ある一つの結果だろうが、順応させる為にその状態を維持し続けた事を考えると、不便極まりないその生活に同情せずにはいられなかった。

「絶対噛み辛いでしょ、それ」

言うと同時に苦無を投げ、ユーリイは力強く突っ込んだ。

相手は飛んでくる小さな刃を例の反応速度で避け、続いて振り下ろされた短刀にも回避する。右腕を下ろした形となった少女へ、顔面を丸ごと噛み砕こうと、全身を飛び込んだ。

直前、左の手刀で狼の喉元を下から叩き込む。僅かに茂った毛皮の中から確かに手応えを感じ、動きが鈍くなる。

生じた僅かな隙を逃さず、即座に追撃を叩き込む。単に腕を振り回すのではなく、様々な方向から体ごと加速させて斬り付ける。相手は尚も攻撃をいなし続けるが、体勢が崩れ、常に受け身に回らざるを得ない格好になる。

少女が無尽に動き回る中、狼は活路を見出したのか、建物が連なる屋根上へ道を兆す。

察知したユーリイは、その方向に沿うように、すぐさま瓦を蹴る。

瞬間、狼は地面に限りなく近い低姿勢で突進した。

横へ振るった刀はわずかに毛皮を削ぎ、人面狼は脱出を果たす。

そして、幾本の矢が降りかかった。

少女の猛攻に集中し、周囲の警戒を緩まざるを得なくなった狼は、例の如く超反応を以って回避を試みるが、全て避ける事は叶わず、くかん 軀幹を二本が貫いた。

いしゆみ 弩——木と金属から成り、引き金 懸刀を引けば強靱な矢が発射できる武器——を引いた人物は、かつてウエンと共に遊戯を嗜んだ三人の一人であるローだった。

表情を変えることなく、祈力の加護を受けた、いしゆみ 弩に矢を置けるほどの筋力を以って、次の別の凶器を直接素手で投げる。

ただの子供である彼らは、原則的に近接での戦いは不利な傾向にある為、斥候や遠隔による攻撃が主な仕事となっていた。その腕は、手毬遊びのように放物線を描き、その先にある的の棒を射る程である。痛手を被った狼へ、ユーリイは更に追撃の一手へ出る。但し短刀では距離が足りない。

少女は、標的の先へ飛びつくと同時に、横へ左腕を伸ばした。手元へ導かれるは、ローの手によって放たれた薙刀。回転されながら飛んだ長物は、差し出した左手が柄の先端になるよう、寸分の狂いなく届けられる。

薙刀を片手で掴んだユーリイはれいりよく 祈力を注ぎ、回転の勢いを乗せたまま、そのまま渾身の力を込めて振り抜く。

矢によって手傷を負わせた獣畜に回避する余力はなく、殺処分を目的とした薙刀は、その一振りで大風を巻き起こすかのように、空気を引き裂いた。

風前の灯火の如く掻き消えそうな狼の天命は、ここへきて更に脅威的な粘りを見せる。

迫りくる刃を本領の反応速度で捉え、大口を開けて極細の歯牙を砕きながら刀をがちりと止めてみせた。

穂先を咥え込んだその顎には、決して逃さないという意味の元が現れており、更に力を強めてゆく。

そして、刃がひび割れた瞬間、れいりよく 祈力が噴き出すように溢れ出した。朱と黒が濃厚に入り混じった霞は、カスミ 人面狼の口内を起点に暴れ回

る。

祈力れいりよくは荒縄のように激しく回転して動き、全身を振じり回す。いかに人体の強化に務めても、直接捻られる類の攻撃には無警戒のようだった。

骨という骨を粉碎し、付随する肉はぶちりぶちりと絞り切られ、祈力れいりよくが足の先まで移動した後も、逆行してもう一周するよう念入りに責め立てる。

一連の動作を終える頃には、人にも狼にも判別できない、紫黒色の大小様々な欠片のみが大量に残された。

「ふう……つと」

戦いを終えたユーリイは静かにそれを眺める。

忌み子ではない。

恐らく、ただの赤子から作り変えたのだろう。

祈力れいりよくによる人体改造には、即興で変えるよりも、徐々に時間を費やして順応させた方がより効果的である。生まれた直後であるまっさらな状態からであれば、理想とする生体を施しやすい。適当な栄養分を強引に与え、強制的に成長させればこれぐらいの出来になるのも頷ける。一、二年ほどの歳月をかけて。

決定づけたのは、戦闘中に出鱈目な文言を投げかけ、何も応じず襲い掛かってきた点だった。忌み子本人、もしくは穢ケガレレにより命令を施された兵士ならば、何らかの反応を示す筈である。

しかし人面狼じんめんろうは、まるで言葉そのものを理解していない様子で意に介さなかった。恐らく、忌み子から与えられた本能の赴くまま、懸命に戦っていたのだと推測する。

全く関心した。物事を適当に覚えてその場をやり過ぎすボウも、見習ってもらいたいものだが。

頭を切り替えて別の考えに集中する。

「うーん……？」

ユーリイは、いかにも納得がいかないように首を傾げた。

抱いた疑念とは、シャーネの頭目である忌み子がどこにいるのか、ではなく、

「なんで、改造具合がこんな温いんだ……？」

敵は、人間の体を変える事が得手ならば、今戦った相手はともかく、周囲の人間達はまだ改良の余地があるように思える。

そもそも、ユーリイが最初に警戒していたのは、毒素を含んだ胞子を噴煙としてばら撒く、等といった制圧的な攻撃である。これの対処方法自体は割と簡単で、穢^{ケガレ}レによって町民の体に耐性を持たせるようにすれば毒の影響はほぼなくなる。ただし、その分を祈^{れいりやく}力にあてなければならぬ為、動きは多少鈍くなってしまうのが懸念点であった。

だが、そういった手段をとる改造人間は一部しかなく、それらは現在までさほど脅威ではない。

かといって、近接戦に特化した戦士を用意した風にも見えなかった。

このままいけば、人員の損耗を想定より抑えたまま、この戦争に勝利を収めることになるが――、

町の全容を見渡す為に配置した数人――主にそれらから通じて、少女はカンラの状況を把握していた。

だが、それだけでは拭いきれない違和感がある。

ユーリイは、今一度祈^{れいりやく}力を集中し、カンラの民衆全ての視覚、聴覚を自分へと共有させた。脳裏に大量の光景と環境音が一齐に重なり、それら全てを一度に正確に処理する。

何か見落としがないか、些細な出来事を見逃していないか、全てを拾いつくすつもりで情報を貪った。

周囲がまだ戦闘を広げる最中に、棒立ちのまま佇むが、それは短い時間で事が済む。

信じ難い場面、異常な事態が丁度目に入り、

「ん、あれ？　嘘？」

少女は、頓狂な声を上げた。

17 悔恨

生物戦争は、大詰めを迎えていた。

ユーリーの睨んだ通り、戦況はカンラ側に傾いたまま、終始優勢に動いていた。

戦場の舞台が本拠地であるのに加え、完全に迎え撃つ形で戦が開始した事等も要因ではあるが、最大の理由としては、やはり相手側の戦力が不足している点にある。

シャーネ側の生物兵器達がいかに協力的な能力を持っていたとしても、ユーリーのように思考の全てを戦いで占めることはできなかった。僅かながら動揺や恐怖といった感情が生まれてしまい、無心で動く戦闘人形達にとつては、それが恰好の的となる。

本来、その穴を埋めるべきである生体改造は、いずれも不完全な形態が多く見受けられた。

ウエンへ言葉を教えられた年配の女性——チュンは、町の中央の内にある、高所の建物の覗き穴から広域を見渡していた。危険が迫れば、その都度下に降りて密やかに移動し、所定の位置について、再び戦地の状況を監視する事が彼女の役割である。

視界を遮らないように、建築物や木々等といったものは元より抑えられて造られていた。幾つもの異形な死体が、道という道に転がり、その上を無機質な足音が流れ、戦火が広がる。

その渦中、敵の姿が現れた。その一人は、チュンがいる建物の下の位置へ向かっている。

観測係をみすみす表立つわけにはいかない。視覚情報を町民全員で共有させ、近い場所にいる者が増援として迅速にやってくる。

現れた敵の正体は、全身を鋭利な刃物として変えられた子供であった。

見るからに背が小さく、彼一人であれば脅威ではない存在。どこからかはぐれてきたのか、少しおどおどとした様子が伺えた。

対して、加勢にやってきた味方は、
血みどろの刀を握る、夕才だった。

「……」

両者が対峙し、男は身長が自分の半分程もない敵を前に、刀を構える。見るからに非力な相手であろうと、油断は禁物だった。

ふとした拍子に、相手の身体が傾く。頭部に髪はあらず、首から上は板のように薄く、顔の周りに刃が広がっており、まるで等身大の大鈍に表情が宿ったようだった。その下の胴体と両手は、細長い紙のようになやかな素材の刃物が何枚も重なり、両足はそれぞれ刺股さすまたのように伸ばし、直立の体勢を保っている。

一体どこに臓器や筋肉が仕舞ってあるのか見当もつかない身体だが、このような相手とは先頃まで幾度となく戦っている。故に、この少年兵も、他と比べて特別というわけではなかった。

苦戦することはないだろう。

自分の職務を全うするべく、下の二人を視界に捉えながら、チュンは周囲を見回し、タオはじりじりと距離を縮めた。

子は、その様子を見て怯えたのか、後ろ足で下がる。しかし、今日こんにちの怒涛の戦いによって変化した地面の足場に躓き、転倒してしまう。絶好の機会を逃さず、剣士は刀を構えたまま走り出した。

刺突の速度は加速していき、相手は何をすればいいかも分からず、成すすべなく迫る刀を眺める事しかできなかつた。

そして、切っ先が標的へ届くまで数寸の所で、

突如現れた霞カスミの壁によって弾かれた。

「……っー」

即座に男は刀を握り直し、後方へ下がる。

前を凝視すると、濃紺の祈力れいりよくは消え、

両者の間に、上から人間が降り立つ。

「……タオおじさん。邪魔してごめん」

ウエンだった。

「……」

その三者の姿を、チュンは視界に捉え続ける。

ウエンは、剣士へ振り向いた。

「おじさんは、悪くないよ。あの子を殺しちゃった事は、ボウに酷い目に遭って、それでおかしくなっちゃっただけなんだから」

優し気に声をかけられたタオは、

「……っ」

一瞬、体が震えるように動いた。

「もう、おじさんに子供を殺させたくない。ここは、任せて」

刃物と化した生物へ向き直り、手を差し伸べた。

この子は忌み子ではない。もしそうであるならば、生まれて間もない自分よりも年齢を重ねている筈である。この子は、明らかにウエンより幼い。自分の肉体を変えているとしても、ここまで無防備な姿であるとも考えにくかった。

「ね、大丈夫だから。ぼく、君を傷つけたりしないから。おいで」

れいりよく 祈力によって操られたシャーネの人達は、改造を大元に充てられている。つまり、ユーリイのように完全に操られているのでなければ、まだ救えるかもしれない。

戸惑いながらも、相手は、少年の柔らかな表情を見る。敵意はないことが伝わったのか、

「……」

恐る恐る、凶器となっている腕を上げていった。

「違うんだ……」

突然、背後のタオが口を発した。

「え……っ？」

ウエンがその言葉に反応した次の瞬間、

刃物の子供は、自らの腕で己の首を斬った。

「っっ」

あまりに薄い胴と頭部が分かれ、血が噴き出る光景が目の前に流れる。

唾然とするしかなかった。

どうして……。

差し出した手を力無く下げた忌み子は、考えた。

まさか、向こうの立場から見れば、自分の兵隊が敵の手に渡ること
はあつてはならないとし、もしその状況に陥った場合、先に自害する
よう祈力れいりよくが働いていた、というのか。

納得のいく結論は下せない。だが、

「……やだ……」

自分のせいで、死んでしまったというのなら——、
せつかく、タオおじさんが救えるんじゃないかと思つたのに——、
そこで、思考は逃れるかのように、先ほどの気にかかつた一言へと
集約していく。

ウエンは、改めて背後へ振り替える。

タオは両膝を崩し、全身をだらりと脱力していた。視線はどこか虚
空を見つめ、口は半開きになっており、まさしく糸を離した傀儡かに
見えた。

人形は、絞り出すように、言葉を並べる。

「俺にも、息子はいた」

「当時、異常なまでに管理下に置かれる狂った制度が存在し、自由なん
てものは一切なく、身内の存在でしか生き長らえる力が出てこなかつ
た」

「そこへ、突然チュンの子が、その日常に耐えられず発狂しだした。俺
の息子は、そいつに刺されてしまい、命を落とした」

「許せなかった。だがどうすればいいのか分からなかった。その後、
自分にできる事を見つめ直した」

「そして、俺はあの子を——」

「同じように狂った振りをして、正気のまま、殺したんだ」

一連の話を聞いたチュンは、

「……」

視線を、二人がいる下へと移した。

「全く、馬鹿な事をしちまったよ」

ウエンは、淡々と口だけを動かしている男を見続ける。

——甘かった。

元凶であるボウが、間違った事実として憶えていたことに呆れ果てるしかないが、自分自身も、カンラが抱える根深い闇の認識を、軽んじていた。

タオおじさんだけじゃない。ユーリイの言っていた通り、きっと他にも似た境遇の人が大勢いる。

この人達を救う方法は、果たして本当にあるのか——。

「分からない」

男は、ゆっくりと視線を移動し、自分を見た。

「あの時、俺はなんでお前に——」

「息子の名を、つけたんだ……」

ウエンは、瞬時に思い返した。

自分の名前が欲しいと願い、それが無意識に操ることになってしまったから——、

答えが結びついた瞬間、

口を、僅かに開けては閉じるを繰り返し、

視界からの情報が認識できなくなり、

両足に、立っているという感覚が徐々に失われていく。

無音の時間が、随分長く流れたかのように思えた後、

少年の、掻き消えるような声で、

「名前……嫌、だった……？」

思わず、曖昧な問いが出る。

「……」

錯覚なのか、タオのその瞳は、揺れているような印象を受けた。

再び、無限に感じる程の時間が過ぎていく。

やがて、迷いが消えたのか、意思を取り戻したように、首を動かして向き合った。

「ウェン」

そして、先ほどまでとは打って変わった、明瞭な声色で告げる。

「緊急事態が起きた。今すぐ私が指定する場所へ来て」

少女からの伝言を伝え終えた後、夕才は何事もなかったように立ち上がり、躊躇のない歩みで消え去っていく。

少年は、その背中を見ることが、とてもできなかった。

少年は、言われた通りの場所へ移動する。

目的地は町中央にある広場。距離にしてそう遠くはないが、すぐに異変に気付いた。

道中、戦闘行為がどこにも行われていない。

先程までの狂騒が嘘のように、町中が不気味なまでに静まり返っている。

その原因も一目で分かった。

シャーネ側の人間達が、一斉に絶命していたのだ。

少年は、悲愴な面持ちでそれらを眺める。いずれの遺体も、戦いによつてではなく、自らの手で命を絶っている様子が伺えた。

信じ難いが、まさか相手は、自慢の戦力を全て捨てたとでもいうのか。

一体、何の為に――？

疑念が脳を支配する中、目的地へ到着した。

「お、来たね」

周りに破壊跡が目立ち、より広くなった広場の大通りで、ユーリイはある一点を見つめたまま出迎える。

そして、その先の、家々の間にある細い道の先へ目を向けた。

「……何、あれ……？」

そこには、黒紫の祈力れいりょくが渦巻いていた。

明らかに尋常ではない量――、かつて少年が限界まで放出した、家一軒程の大きさを超え、更にその体積を膨張していった。

ユーリイが語る。

「うちの町民の目を介して一部始終見てたよ。簡潔に言うとな、敵の一人があそこに表れて、祈力れいりょくを出した。シャーネの忌み子が、自分を改造して潜伏していたんだらうね」

黒紫の祈力れいりょくの位置は、直前にボウを開放した場所からはそう遠くない事から、間違いではないと判断する。

黒幕の忌み子は、あそこにいる。

少年は横に手を伸ばし、攻撃を仕掛ける為に力を蓄えるべく、紺の霞カシミを練り出す。

焦る気持ちとは裏腹に、ユーリイは落ち着いている様子だった。

「ボウはあれにやられて、その後祈力れいりよくが急速に強くなっていった。まるで取り込まれたみたいにな」

疑問が洪水のように溢れ出る。他者の祈力れいりよくを自らのものにするといった真似は、流石にユーリイでもできない筈だ。

「……どういう事？ 改造が『特色』じゃなかったの？」

「うーん。そうじゃなかったっぽい」

少女は、ぼつが悪い雰囲気を醸し出した。

「ちよつと言いつきさせて。シャーネの町はこれまで時々偵察に行かせて、様子はちゃんと見ていたの。その時は確かに奇態な人間たちで溢れていたし、『変異』が起きた感じも見られなかった。実際今、そういう者と戦っていたわけでしょ？」

「でも実際は……」

「そう。違う。一体どういう事なんだろうって考えたよ。びつくりして一瞬、カンラの人たちを操るの手放しちやった。一齐に敵全員が自決したから頭を回す余裕ができたってのもあるけど。お陰で一つ、有力だと思ふ仮説が浮かんだ」

ユーリイは、薙刀を肩に担いだ。

「私がシャーネを調べた時期は、あくまで『私が生まれてから現在までの間』、もしその前から『変異』が起きていたとすれば、気付きようがない」

「……」

「せめてその頃の話が聞けたらよかつたんだけど、当事者の筈の、あの中にいるボンクラは、あまりに物事に対して無頓着過ぎるから、情報なんてこれっぽっちも持ってないし……、ほんつと役に立たなかつたな。最後まで」

はあー、と大きな溜息を吐いてユーリイは落胆した。

「話戻すけど、つまり、変異前は『改造に特化したもの』で、変異後が『他の忌み子を取り込んで祈力れいりよくを自分のものにできる』って考えれば

辻褄は合う。多分一人か二人を吸収し、その蓄えた祈力れいりよくでシャーネの住民を弄った。全ての人間にやるのは本来なら難しいだろうけど、経験がある改造なら幾らかやりやすいだろうし、普通より強い祈力れいりよくを持つてるから、その余裕はある筈。何より、自分の『特色』を周りに欺けるのが大きい」

未だに半信半疑なままではあったが、

「私たちだって、生まれた時に親を摂取したんだから、それほど不思議じゃないでしょ？ 対象が変わっただけ」

悲しいことに、その説明で腑に落ちてしまった。

「忌み子そのものが目的だったとしたら……ウエンは何か聞いてない？ シャーネにいた頃、忌み子を見つけたらここへ集める、みたいな話。一瞬でもいいから」

「……あっ」

過去の出来事が脳裏を走り、確証を得た。

その通りだ。母が殺害されたあの時、

『子は、遺体として回収させてもらう』、そう言っていた。遺体をわざわざ回収というのは、今思えば確かに違和感でしかない。

また、『原型は崩さないように』とも続けていた。あれは、取り込む体が全て揃っていないければ不十分だから、という事では――。

「その反応だとあったっばいね。じゃあもう決まりか。ついでに言うのと、ウエンも同じってことかな？ 変異が起きたのを隠してたのは」

「……」

沈黙をユーリイが受け止め、遠方の敵へ目を向ける。

「それはさておいて、今は目の前の問題と向き合おう。まだどんどん祈力れいりよくが膨れ上がってるのを見るに、あれはシャーネの民衆を自決させた分の力を戻してる所。私の見立てだと、あと五割ぐらいは増えていく」

少年は、横に放出を続けている霞カスミの感触を確かめた。

「これ以上祈力れいりよくが集まる前に、早く叩かないと……」

焦燥に駆られる中、「いや」とユーリイ。

「どうせなら一箇所に集束してもらった方がやりやすい。集まり切っ

た祈力れいりよくでも、倒せる自信はあるよ。だから、今は準備を整える。私はカンラの大多数の住民をここに集合させてる所。ウエンはそのまま祈力れいりよくを出し続けて」

少年は、余裕な表情を見せている隣へ振り向いた。

「どこからその自信が？」

「シャーネの敵全てを見てきたからね。その立ち回りを見て大体わかったよ。ぶっちゃけ相手は戦いが不得意。忌み子っていうのは、祈力れいりよくの量がそのまま強さに直結するわけじゃないの」

少女は、薙刀を矯ためつ眇すがめつする。

「現にこうして、わざわざ自分から目立つ真似してるのがいい証拠。ほんと何がしたいのかわからないんだけど、あいつは一人を吸収しても、最後まで潜伏を貫いて次の機会を伺うべきなんだよ。私にはすぐバレるから通じないけどね」

「……本当に勝てるの？」

「嘘つく場面じゃないでしょ。二人がかりでやればいけるいける」

「もつとも、多少の被害は出るだろうけど、仕方ないね」

少年は、苦しそうに目を伏せた。

要は、カンラに死傷者が更に増える、ということである。

ここまで皆を傷つけないよう尽くしたのに、まだ続くのか。

いや、元からぼくには、それほど大した事なんてやっていない。

なんとかして町の皆を守りたい。頭にあるのは、その一心のみだった。

そこではたと気付く。

何故、自分は他の忌み子と違って、普通の人間の事を想っているのだろうか。

世話になっっているとはいえ、ここに住むようになってから、まだ日は浅い。それも、支配下にある人達に囲まれた日常である。

そしてもう一つ、

どうして忌み子そのものに、強い嫌悪感を抱くのだろう。

「……」

焼かれた左腕の先へ視線を向けると、自分の中にあるほぼ全てを出し切った、濃紺の巨大な祈力れいりょくが保たれている。そこから放たれる異様な存在感と威圧感からは、触れたら最後、全てを滅するのではないかと、本人すらも感じ取れる。

同じように膨張し続ける黒紫色の祈力れいりょくを見ると、突如その動きを止めた。その大きさは、自分のその三倍近くまで膨れ上がっている。

「やつぱり、あれくらいで打ち止めらしいね。こつちも準備は万端だし、そろそろ行こうか」

町民を集め終えたらしいユーリイを差し置いて、少年は前へ出た。

「いい」

振り返らずに続ける。

「ぼく一人でやる」

「……んん？」

横の祈力れいりょくの濃度を薄めて透明にした後、引き連れたままゆつくりと敵の元へ歩む。

「ちよつと、何のつもりー？ 相手は真っ先に祈力れいりょくだけ強いボウを狙って取り込んだんだよ？ 正面から攻めるのは絶対得策じゃないって。協力してやらないと」

「信用できない。ユーリイはそこで見てればいい」

抗議の声を無視し、歩き続ける。

やがて、二人の忌み子が、対峙した。

紫の極大の祈力れいりょくは、今度は徐々に圧縮するように縮まってゆく。その末は、人の形へと成り代わっていった。

衣服は自分と大差ない素朴なもの。二、三歳上程の年齢で、目鼻立ちは整っており、睫毛が長く、穏やかな表情を浮かべている様は、美少年という括りに入るだろう。しかし、傍から見れば屹立しているだけの小さな姿であるにも関わらず、微動だにしないその堂々とした姿

勢からは屹然きつぜんな気風が見られ、厳かで貫禄がある雰囲気とその者から漂わせていた。

とても、先ほどまで悍ましい色で包まれていた人間とは思えなかった。

「やあ」

爽やかな笑顔で、声を発する。響きの良い声音だった。

「シャーネを統括する、クワンだ」

名乗りを上げたクワンは、問いかける。

「あなたの名前は？」

「……」

答えられなかった。

タオとのやりとりが、少年の脳内を支配する。

「もう一度問う。あなたの名前は、何だ？」

再度の詰問には、明らかな威圧が込められており、相手が膨大な祈力れいりょくを持つ事も相まって、恐ろしいまでに命の危機を感じる迫力が発せられていた。

「なんともはや、失礼な方だ」

それでも黙したまましていると、クワンは鼻で笑う。

「実をいうと、名前は既に知っている」

「……え？」

「当然じゃないか。私の町に元いた、あなたの母親から既に伝え聞いたのだから。もっとも、そちらが名乗らない以上呼ぶつもりはないがね」

「……っ」

苦虫を噛み潰したような思いだった。

本来の名前——、聞きたくもあるが、耳にしたくない気持ちも相半していた。

返答に窮していると、幸か不幸か、黒紫の忌み子は次の関心へ移る。「あなたの母親は勇気のある方だった。一早く危険を察知し、稚児ややくを抱えたまま外へ逃げ出す胆力、実に天晴れといえよう。あの時、自ら出向いて親子ともども喰い殺したかったが、わたしの存在はまだ秘し

ておきたかったのですね。いやはやなんとも恐れ入る」

相手は、わずかに首を傾けた。

「しかし、紆余曲折を経て、奇跡の生還を果たしたあなたは、ここで何をしているのだ？」

質問の意図が掴めず、眉を潜めた。

「なぜ忌み子が、自らの身を呈して人を庇う真似をする？ とても考えられない事だ」

「なんでって……別に理由は……」

「それはおかしいだろう。我々にとって人間とは、玩弄がんろうする為にのみ価値がある存在なのだから」

聞き捨てならない事を平然と言っただけ、言葉を返す。

「そんなの……誰が決めたの？」

「決めるも何も、そういうものだ。想像してみろ。目の前に数えきれない玩具があり、どう扱おうと誰も咎める者がいなくなれば、幼心のまま好き勝手に扱う。壊そうが、改造しようが全て自由だ。言うなれば我々は、その玩具を取り合っているに過ぎない」

呆然と絶句する。

何一つ共感できなかつた。

改めて、忌み子という存在を突き付けられ、深く気落ちする。

こんな奴が、世の中に溢れているのか。

「もつともわたしは、人間などどうでもいい。」

内にあるのは、己をいかほどまで高められるか。わたしはただ、ひたすらにそれのみを追い求めている」

恍惚に、両手を広げて語った。

「今一度祈力を集めたのもそうだ。より強まった力を、自身の体で味わいたかったのだ」

ユーリイが小さく口を開き、

「あ、それで。なら納得」

何度も小振りに頷いた。

クワンは空を眺める。

「わたしの『特色』は、恐らく限界というものが無い。底が存在しえぬ無尽蔵の器——もしも、この世に現存する忌み子の祈りを、全てこの身に宿るとすれば、想像するだけで、胸焦がれるのだよ」

悦えつに浸ひたった後、手を下ろす。

「なればこそ、その頂点の景色が、果たしてどのようなものなのか、是非とも眺めてみたいと感じないか？」

「……全然」

ウエンは、短く吐き捨てた。

「どこぞの偽善者よりは余程理解できる理念だと思うがね。ならば問おう。あなたは一体、いかな信念を持っている？」

気分を害した様子は無く、余裕の態度も崩さない。自分が負ける筈がないという自信が漲っているのだろう。

「道徳、教育、人を慮る行為、そういったものは全て、人類が長く存続する為の苦し紛れの策でしかない。生まれたばかりのあなたには、それすらさほど縁がないのではないか？」

そのような観念、祈イりの力を持つ我々にとっては無力だ。寄る辺なき弱者は、か細くひ弱い、最後に残った信条を唯一の取り柄、誇りだと強引に納得してしまう。そして、強者はそれを絶好の的として利用するのだ」

クワンは口元を歪める。

「弄ぶにしても、脆いという他ないが、汲めども汲めども尽きぬ玩具共だ。あなたはそれらを、果たしてどうしたいのだ？」

沈黙は、長く続かなかった。

これまで出会った、変形された人々、灰に変色された人々、意思を奪われた人々の姿が頭によぎり、

偽りだった、三人の家族の姿が胸中を浮かんだ。

ウエンは、相手を憐れんだ目で見据えた。

「人を、道具に例えないでよ」

冷ややかに、侮蔑を含んで言葉を浴びせる。

「さつきから言ってる事なんて、言い訳を自分に言い聞かせてるみた

いだ」

理解していないのか、クワンは意外そうな顔をした。

「それはまたなぜだ？　そもそもにして、人が何をしようと、各々の自由だ。誰にも束縛される権利はない。あなたがわたしに指図される謂われも」

「……そういう話じゃない……」

いつの間にか、先ほどまでよりも随分、眼前の子が幼く見えた。

「自慢げにぼく達がなんなのかを語ったって、結局忌み子も、人がいなかったら生まれる事もできないんだ」

少年は、相手の視線を、静かに受け止めた。

「人に、悪い事しちやいけないだなんて、子どもでもわかるもん」

静かに、ほだされる様に、クワンは問うた。

「それが、我々の存在理由だとしてもか？　母親を喰った、あなたのように」

思考が真っ白になりながらも、

彼は、半ば無意識に答えた。

「そうだよ」

ウエンを皮切りに、数瞬の静寂が流れる。

心底からつまらなさそうな表情を浮かべた子が、何かを諦めたような素振りを見せた。

「所詮相容れる筈もないか。呑み込む前に、珍しい動きを見せる忌み子を知っておこうかと思っただが、やはり時間の無駄だったな」

紫黒の色が、再びクワンから放たれた。

空気が震え、周囲の瓦礫が彼を中心に渦巻く形で離れてゆく。

先ほどのように、膨大な量の祈力れいりよくが展開され、それに触れれば一瞬で死ぬ。そう感じるほどの異様な圧迫感が、強い風と共にウエンの身に受けた。

「わたしの目的は変わらない。常に高みを求め、万難を排し、天を超えて登り詰める。」

「あなたという礎を築き上げた先にな」

祈力は際限なく増え続けるのを見て、ウエンも動いた。

ここへ対峙する前から用意した、色濃く交じり合う紺と黒を、その場に現す。

二人が生み出す規模の差は歴然としており、同じ色の水量を同時に器へ注げば、紫の禍々しい水が更にその量を増やすだけの結果になるだろう。

「……」

しかし、ウエンは怯まず、攻撃に備えて濃紺の祈りを目の前へと操作する。

その先にある標的は無論、自分と同じ動きを見せる忌み子。

やがて、互いの殺意が動き出し、

二つの巨大な祈力が、激しく衝突を起こした。

19 特色

およそ三時間^{一刻半}前——、ウエンとユーリイがカンラから発つ直前の廃屋の出来事、

ボウに叩きつけられたウエンは、ある事を思索していた。

このままでは、カンラの忌み子二人にいいように利用されて殺されるのは目に見えている。

仕掛けるとしたら、件のトンセンか、又はその道中に何かがあるとしか思えない。

となれば、今この場でこちらから攻めるのが上策ではないか。

ユーリイに会話を聞かれる心配はないと言っていたが、それはあり得るだろうと当たりをつけていた。なぜなら、住民を通して聞き耳を立てていても、逆に自分に気付かれる可能性がある。表向きは二人の忌み子は繋がっていないのだから、それは不自然だろう。

やるなら、ここしかない。

後がないとはいえ、そう結論付けられたのは、我ながら不思議に思っていた。

ただ、何故だか、確信があったのだ。

自分の『特色』なら、ボウを倒せると。

ボウの周囲に巡らせた透明の祈力^{れいりよく}を発現させ、一斉にその対象者へと集中させる。

地面に押し付けられたままのウエンは、その手応えを感じさせたまま立ち上がった。

ボウは、手足をばたつかせ倒れこむ。一言も発せられることなく、もがき苦しんでいた。

自棄気味に放った攻撃だったので、ここまで上手くいくとは思わなかった。

これで確証を得る。

自分の『特色』とは、他者の祈力^{れいりよく}に特化した祈力^{れいりよく}。

偶然か否か、それはウエン自身が忌み子を深く嫌悪する理由とも結

びっぴいていた。

ボウを手中に取り、情報を引き出すべく穢^{ケガ}レで操ろうとするが、思ったより手こずってしまふ。ユーリイが言っていた、祈力^{れいりよく}同士で交わってはならないという言葉を思い出す。あれは本当だったのだろうか。

特色の事を置いても、実態が分かるまで多用は避けるべきだろう。最終的に、ボウを操作することには成功したが、時間をかけすぎて門前にいるユーリイに不審を抱かれたらまずい。目ぼしい情報を聞き出してひとまず切り上げた。

この特色において注意するべきは、決して無敵ではないという事である。

例えば、祈力^{れいりよく}が人間や凶器に宿ったものへ攻める場合、時間を要する。その理由は、いわば不純物が混じる祈り^イなので効果が発揮されにくいのだと推測できる。また、この特色はあくまで対祈力^{れいりよく}に特化しているというだけであり、打ち克つには少量ではなく、それ相応の適量が必要となる。

過信は禁物だが、逆に言えば、単純な祈力^{れいりよく}同士でのぶつかり合いならば、こちらが有利、という事になる。



巨大な祈力^{れいりよく}が交わる瞬間、嵐が巻き起こるかの如く、瓦礫や木々が周りへと荒れ狂い、辺り一帯を吹き荒んでいった。立つのもやっとな状態のまま、ウエンは霞^{カスミ}を前へと操作する。

紫黒を押さえ込む濃紺の祈り^イは、まるで龍の口を思わせ、少しずつ削り取っていった。

自らの圧倒的な力を疑わなかったのだろう。クワンは驚愕に満ちた顔を浮かべた。

他の祈力れいりよくを取り込む特色と、他の祈力れいりよくを得手とする特色。どちらも似通った性質だが、この場を見る限り、後者が優勢らしい。このまま押し切ればウエンの制勝となる。

しかし、そうはすんなりと勝たせてはくれない。

「これは驚きだ。だが、まだ甘い」

相手の忌み子は、霞カスミの動きを見て、攻め方を変える。

彼が十全に持つ祈力れいりよくを、ウエンから距離を話して全体に広げた。

ウエンもそれを察し、攻撃に回している祈力れいりよくの半分程を、自分の周囲へ囲ませる。敵は攻撃を分散してこちらの力を弱めようとする作戦だが、無防備でいるわけにもいかない。

いかにウエンの持つ祈力れいりよくが協力であろうと限界は存在する。どこか一点でもその許容量を上回る力で攻められれば、成す術はない。

負けじと、クワンへ攻めの勢いを強めるが、どれだけ祈力れいりよくを押し進んでも底が見えず、むしろ噴出する量は増えていき、無尽蔵に放たれていくようだった。

このままではジリ貧——。ならば、危険を背負うしかない。

一度、全ての祈りイイを透かし、クワンの攻撃を一手に受ける。

その後、再び戻して、攻めに転じた分の、相手の防御が緩んだ瞬間と箇所を一点に集中させ一気に斬り込む。

問題は、一度攻撃を食らって無事で済むのだが、自分の体にある祈力れいりよくが支えになると信じるしかない。他人を寄せ付けけない特色ならば、幾らか身は保つ筈だ。

視界には、僅かにクワンを捉えている。その姿を睨んだまま、作戦通りに動こうとした瞬間、

標的が、無数の武器に串刺しにされた。

「えっ——？」

ウエンの驚きの声と共に、更に槍や刀、矢の幾十本がクワンを刺し貫く。

それらが飛んできた方向は、全角度の、あらゆる場所から投げられ、正確無比に全ての凶器が小さな身体へ射る。

ウエンは、紫黒の色から解き放たれ、敵の祈力れいりよくが弱まっているのを

見てから、背後のユーリイへ目をやった。

少女は、片手の人差し指を斜め上へ向けていた。恐らくあの武器群は、ここへ集まった町民が、ユーリイによって投擲させたものなのだろう。

余計な事をするな、と抗議の目を向けると、

「見てればいいって言ったじゃん。手を貸すなどとは言ってないでしょ？」

都合の良い解釈で彼女は釈明する。

ユーリイの助力なしで倒したかったが仕方がないと踏ん切りをつけ、改めて向き直り、再び霞を頭上に用意する。

大岩のような塊のそれで今のクワンを叩きつけければ、確実に絶命するだろう。あれほどの祈力を内に秘めているのなら、濃紺の特色でも操ることはまず不可能だ。

そうなれば、自分の本当の名前は、知られないままになる。

「……」

ウエンは首を振った。もう未練は残さない。

決別するべくここで仕留めると決め、更に祈力を増幅させる。

クワンは多数の武器に遮られる視界の中、片目でそれを見た。

自らの最期を悟り、

笑みを浮かべた。

「そうか……、私の頂は、

ここまでの高みだったか……」

体から生えた夥しい程の凶器に、多量の血が滴った。

ウエンは、有無を言わさず、

渾身の力で、祈りを振り下ろす。

一つの命を潰した感触が、少年の心に刻まれた。

20 祈り

何故、この世に忌み子が存在するのか、私なりに考えたことはある。しかし残念なことに、その結論に至るまでの過程は、自分好みのものではなかった。

ウエンには以前、『物語に納得のいく合理的理由が欲しい』とは言ったが、それは何も、人間の感情等といった不合理を否定しているわけではない。感情を切り離していいのなら、極論、登場人物を虫か動物に置き換えてもいいということになるだろう。物語には、読む者と同じ、人間が必要なのだ。

人々が矛盾や不条理を抱えたまま、整合性を求めて入り乱れる様は、なんとも愛らしい姿で見蕩みどれてしまう。

故に私自身も、論理的な理屈を持つてあらゆる物事を図りたいのだが、悲しいかな、忌み子という生き物には、それらを超越する力が備わっているらしく、本能によってその説明がついてしまった。

『祈れいりよく力』とは、過去人類が長きに渡って蓄えられた本来の意味での『祈り』が原動力となり、積み重なったそれらが赤子に宿るのである。云わば、感情の変化がそのまま見えない力となって現れるようなものだろう。

勿論、それは祈りの他にもある。希望から絶望へ堕ちる瞬間等が顕著だとは思いますが、恐らくそれでは力として変換されない。人々の願い求める行為が、結果として形に現れるのだ。

では、その力は何故、人を苦しめる能力に特化しているのか。忌み子は何故、喜々として害を人へ与えるのか。

その説明には、トンセンの忌み子を例に挙げればわかりやすいだろう。あの町の住民は、まさしく絶望に身を焦がされる日々が続いていた。逃げることも歯向かうことも決して叶わない状況で、その人々は最後に何ができるのか。

『どうかこの狂った現状から好転してほしい』と、祈る事ぐらいである。

そしてその祈りが流れに流れ着き、再び新しい忌み子へ、祈れいりよく力と

して流れる。

祈りにも種類はあるが、日々手を合わせて平穏を願う類のものでは弱く、力として変換されないう。そういった生温い想いより、絶望の淵から必死に念じる願ひ方のほうが力強いのは想像できる。

そして、負から生まれた念が纏わりついた人間は、まともな心身から逸脱した人格が身に着くこととなる。

人に『祈らせる』というのは、忌み子の本能的な要求でもある。故に、それぞれの趣向を凝らした地獄を、人々へ与えるのだ。たとえその祈りが、自分自身に還元されないと分かっても。

ただし、捻子くれて生まれた人格のあまり、その本能からかけ離れた行動を起こす忌み子も存在する。私のように無駄に人の数を減らしたくない、合理性を追求した動きは、結果として祈り（イ）はあまり発生しないだろう（勿論それが生まれる状況は私としても大変結構で嫌いではないのだが）。

ウエンもまた同様である。

同族を嫌悪する気質と祈力（れいりよく）は、相対的に通常の間並の価値観を身に着ける事となり、人々に祈りを引き起こす状況に追い込もうとしない。単に偶然から生まれた産物だが、当人はそれが本来の在り方だと思っているらしい。私としてはどちらでも構わない話だが。

ここからが問題となる。

私たち忌み子は、『心から祈る事』はできない。それがどれだけ無駄な行為なのかを、自身の体に染みついてい『力』が教えてくれるのだから。

しかし、ウエンに限っては違う。彼ほどの特殊な祈力（れいりよく）と、人並みの感性を併せ持っていれば、真の意味で『祈れる』かもしれない。

私とウエンは、カンラから西の、とある森の中を進んでいた。

歩く彼の姿を後ろから呼びかける。

「こんな所に一体何があるのー？ そろそろ教えてよー」

「……」

返答はない。よほど嫌われてしまったようである。私としてはで

きる限り友好的な関係を築いておきたいのだが、価値観の相違による軋轢の差は中々埋めるのが難しい。少なくとも私にとって、物事に対してあまりに無頓着であるボウよりかは数段価値ある人物なので、手放すのは勿体ないだろう。

歩き続けると、目的の場所へ着いたらしい。彼が止まった場所は、景色は何ら変わっていないが、元は人だった何かが散乱しているのが唯一の特徴だった。

そのうちの一つにウエンは座ると、ある物を拾う。

血と泥と虫で汚れきった、ぼろぼろの着物のようなものだった。

それは何かと尋ねようとすると、こちらを見ることなく、微かな声だけが返ってきた。

「おかあ、さん……」

なるほど、と納得した。ウエンはここで母親を殺して摂取したらしい。

直後に、自分の言動に気を付ける。恐らく今の場で変に茶化すと間違いく激昂する。一応空気を読んで黙っておいた。

ウエンは、拾った遺物を抱きしめ、ぎゅつと目を閉じる。

悲しみをその身に受け止めているのか、

胎内にいた頃の記憶を巡らせているのか、

もしくは、

祈りを捧げているのか。

忌み子が祈る事はある得ないが、もしもそんな事が起こり、祈力れいりよくが発生するととなると、

それが果たしてどんな働きを見せるのか、全く予測がつかない。

人間側に寄り添う筈のウエンが、結果的に通常の忌み子よりも、無秩序で不安定な存在になったのは皮肉というべきなのだろうか。

とはいえ、あくまで私の見立ての話ではある。案外大した事態にはならないかもしれないし、思いもよらぬ角度から変容を起こすかもしれない。

いずれにせよ、今後の彼がどう動くのか、実に見物である。

自らが殺した証をその胸に抱く御子様は、果たして何を祈り願うのか。

それは、彼本人でしか知り得ないだろう。

21 一幕

家屋の中の一室で、二人が相對していた。

ウエンは、懸命に話す。

「——だから、タオおじさんはそのせいで正気を失って——」

チュンは、無表情のまま、聞いていた。

「——それで、その……、その子を殺したのは、あの人のせいじゃなくて、そういう状況に追い込んだ人が、原因なんだ」

しかし、口を開くにつれ、不安になっていく。自分自身でもこんな説明で納得してくれるか疑問だった。それでも、こう言うしかない。

「——おじさんも、すごい悔やんで、反省してるから……、許して、あげない、かな……」

「……」

息苦しい間が、どんよりと流れた。

ユーリイの穢^{ケガ}レを外し、カンラの町民を自由にする。その際、忘れ去った陰惨な記憶が蘇ってしまう問題をどう解決するか。

ウエンは悩んだ末、真正面から向かい合ってもらう方法をとった。つまるどころ、こればかりは本人が乗り越えなければならぬ事態である。その為には、変に小細工を入れないほうがいいと判断した。

だが、果たして他人に諭されて、踏ん切りがつけるものなのだろうか。今まで一緒に暮らしてた人が、実は息子を殺していて、相手も自分もその事を忘れたまま、三人で家族のように振る舞って平穩に過ごした後、突然その事実が明かされ、全てに納得して今後も希望を持って生きよう。

……そんな風に、思えるのだろうか。

チュンは、下顎だけを動かすように、口を開いた。

言葉を出すのかと思えば閉じ、また開いては閉じを繰り返す。視線をあちこちに移し、膝の上に置いた両手が、宙に絵を描くような、置き場を失った動きを見せる。

それらの怪しげな動作が、次第に早くなっていく。

突然、一連の動きを止めた。

依然として無表情のままに、両目はどこか遠くの一点を見つめる。

「……」

固唾を飲んでその視線を受け止めていると、相手は何の前置きもなくすつと立ち上がった。

歩き始め、向かった先は、小さな箆筒だった。

嫌な予感が走り、用意を持って静かに近付く。

チュンは、取り出した小物入れの箱から、裁縫用の針を手にし、流れるような動きで、自分自身の眼球へ刺そうとした。

「駄目！」

最悪の事態を想定していたウエンは、予め準備した祈力れいりよくを顔の前に張り、針を防ぐ。

瞬時に、その針を祈力れいりよくで掴み、チュンから引き離れた。同時に小物入れも傍から傍から話す。

すると、チュンはへたれ込み、喚くように泣き始めた。

「ああああああ……」

「……」

その悲痛な叫びに、少年はただ立ち尽くす事しかできず、

「死なせてよお……」

嘆きに近い嘆願が、耳に届いた。

言葉を教わり、寝食を過ごし、一緒に笑い合った母親代わりの女性。その変わり果てた姿を見ると、堪えられなかった。

ウエンは、震えた手をチュンへ向ける。

「……ごめんなさい」

家から出ると、眩しい日差しが差し込む。それを手で遮ることも、瞼を閉じることも、行わなかった。

「だから言ったでしょ？ ああなるからやめときなって」

ユーリイが横から近寄ってくる。

「……うるさい。引っ込んでよ」

「ねー、流石にその言い草は酷くない？ せっかく穢ケガレ外してあげたんだからさー」

「……じゃあ、ちよつと聞かせて。他人同士の穢レケガを合わせると危険になるって、本当なの？」

「あああれ、嘘だよ」

しれつと言いのけた。

「いや、嘘っていうより、危険は危険だけど、そこまで脅威に感じるほどではないっていうのが正しいかな。だからそこまで重要視してない。当時のウエンにはあまり動いてほしくなかったからそういう情報で教えたけど。ごめんね」

自分がボウを操るのに疑問に思わなかったのも、その考えがあったからとなれば筋は通る。この情報が嘘かどうかは、実際に試してみればすぐに分かるが、多分信用していいものだろう。

「実はね、それを利用して、忌み子同士離れた場所でも連絡が取り合える方法があるのよ。私がやってるような、視覚聴覚共有するのに似た感じで、結構使える。過去にちよつとした実験で編み出したの」

「……なんでボウにそれを使わなかったの？」

そこまで便利な方法があるなら、奴を尋問した時に気付けた筈だが。

「あいつと脳内で会話する、って事になるんだけど、どうしても生理的に無理だった。ボウって自分の命とか含めて諸々に頓着無いから、合理的に動かない事が多くて終始馬が合わなかったんだよねー」

話半分に聞き流して、次の題に移す。

「……ならもう一つ。人の記憶って消せる？」

「うん？ そりゃ私が普段やってる事だし」

「そうじゃなくてその後。しばらく忘れさせるようにして、穢レケガを解いた後も記憶からなくす事ができるのかどうか」

ユーリイは腕を組んで考え出した。

「多分できるんじゃない？ 記憶ってやっぱり不確かなものではあるし」

それを聞いて希望が沸いてきた。

カンラの人たちに辛い過去を忘れさせ、脅威が迫ったら自分が守り通す。これができれば、皆が平穏を過ごすことができる、まさしく

ウエンが描く理想だった。

「でも、印象に強く残ってるのは特に時間がかかるだろうねえ。何かの拍子で別の所から結びつく事だってあるし。記憶消すのに注力しても、多分四、五年以上は覚悟したほうがいいね」

「……うん。わかった」

ユーリイに頼んだほうが手っ取り早いかもしれないが、そもそも彼女を信用できるわけがない以上、やはり自分がやるしかない。

「まあそれが無難なやり方だね。いいと思うよ？ 結局祈力れいりよくに頼る羽目になるけど」

「ねえ。言っておくけど、ぼくのお陰で被害を抑えたの、忘れないですよ」

「はいはい。わかってますよー。本当に感謝してるんですから。できる限りは協力してあげるって」

そう言い残し、ユーリイは立ち去った。

「……」

しばらくして、ウエンも歩き出す。

目指す場所はなく、ただカンラをふらふらと彷徨っていた。

町中を歩くと、損壊している建物の修復に勤しむ人々が目に入る。その全てが、効率よく全く無駄のないと思える動きでてきぱきと進んでいた。この進み具合なら、元の形に戻るのはさほど時間はかからないらしい。

まるで、乱れない蟻の行進のようだった。

ついさつき、自殺を止めて元の生活へと戻したチュンで実感する。今のウエンでは、その特色ゆえに、十分に人を操ることができない。これではせいぜい、あと七、八人が限度だった。まずは穢ケガレを習熟する必要がある。それまで住民には辛抱してもらおうしかない。

……しかし、本当にこのやり方でいいのだろうか。

ウエンは、近くの椅子に座り込む。頭を落とし、大きく息を吐いた。どうしようもなく不安だった。今後のことについてもそうだが、

それ以上に、自分には、寄り添える人が誰もいないのが辛かった。ユーリイは言わずもがな、他の人も、支配下にあることは横に置い

ても、心の底から信頼できるといっわけでもない。

特に、タオについては、どう接すればいいのか全く分からなかった。人の名前を勝手に奪ったような形になって、自分はそれを謝罪するべきなのか、大事にするべきなのか。思考が纏まらず、怖くて会うことができない。

孤独感は深まる一方だった。

これが人の持つ、『感情』というものなら、本当に厄介な代物である。少しだけ、忌み子の連中が羨ましく思えた。勿論、感情が全くないという事はないだろうが、少なくとも今のようによく悩むことはないと思像できる。

ウエンは、切実に思った。

「……誰かと、笑って話し合いたいよ……」

意識の底に沈んだまま、長椅子に一人掛けていると、果たして、その望みが叶ったのか、声を掛けられた。

「よっ。どうしたんだウエン？ そんな落ち込んで」

驚いて顔を上げると、

「ロー……っ？」

かつて手毬で遊んだ子供が目の前に立っていた。他の二人は見当たらない。

ウエンはすぐに思考を回す。まさかユーリイが探りを入れてきたのだろうか。

一体何を言い出すのかと身構えると、
「遊ぼうぜー！ 今度は花札ってヤツ。今持ってる友達の家に向かってる途中だ」

期待に満ちた笑顔でそう言った。

「……」

恐らくだが、素の性格で誘っている。操られてる中でも、カンラの町民はこういった最低限の自由意思は持っているらしい。それに、こんな露骨な時にユーリイが仕掛けるのもないだろう。

「……うん。行く」

結果として、彼女に見張られることになるかもしれないが、それでも構わなかった。

今はただ、自分の気持ちに従いたい。

友達と再会できた、この偶然に感謝して。

(了)